福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1349 集

比恵 81

—比恵遺跡群第 142 次調査の報告—

2018

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1349 集

比恵 81

－比恵遺跡群第 142 次調査の報告－

調査略号　HIE-142
調査番号　1603

2018

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、数多くの文化財が残されています。その中でも福岡平野は福岡の歴史を考える上で重要な遺跡が数多く残されています。これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴う比恵遺跡群第 142 次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から古代にかけての集落を確認することができました。これらは福岡平野の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後に事業主様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月 26 日

福岡市教育委員会

教育長　星子　明夫

例言

1. 本書は、福岡市博多区博多駅南 6 丁目 17-1 における共同住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成 28 年 5 月 9 日から平成 28 年 9 月 16 日にかけて発掘調査を実施した比恵遺跡群第 142 次発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課 瀧本正志・山本晃平が担当した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成は、瀧本・山本が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は相原聡子・撫養久美子・山本が行った。
6. 本書に掲載した遺構の写真撮影は瀧本・山本が、遺物の写真撮影は山本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は相原・山本が行った。
8. 本書で用いた方位は磁北である。
9. 本書で用いた座標は世界測地系による。
10. 調査で検出した遺構については、通し番号を付している。
11. 遺構の呼称は掘立柱建物を SB、竪穴住居を SC、溝を SD、井戸を SE、土壙（墓）を SK、ピットを SP と略号化した。
12. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用されていく予定である。
13. 本書の執筆・編集は山本が行った。

比恵遺跡群第 142 次発掘調査基本情報

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	第 142 次	遺跡略号	HIE-142
調査番号	1603	分布地図図幅名	東光寺 37	遺跡登録番号	0127
申請地面積	744.66 ㎡	調査対象面積	430 ㎡	調査面積	379 ㎡
調査期間	平成 28 年 5 月 9 日～平成 28 年 9 月 16 日			事前審査番号	27-2-992
調査地	福岡市博多区博多駅南 6 丁目 17 - 1				

本文目次

第１章　はじめに・・・

第 19 図　井戸実測図〔2〕（1/40）・・21
第 20 図　井戸出土遺物〔1〕（1/3）・・22
第 21 図　井戸出土遺物〔2〕（1/3）・・23
第 22 図　井戸出土遺物〔3〕（1/3･1/2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
第 23 図　井戸出土遺物〔4〕（1/3）・・25
第 24 図　土坑実測図（1/30･1/20）・・26
第 25 図　土坑出土遺物（1/3）・・27

図版目次

図版 1　（1）1 区調査区全景（南西から）
　　（2）2 区調査区全景（南西から）
図版 2　（3）3 区調査区全景（南西から）
図版 3　（4）SC11（西から）
　　（5）SC24（南東から）
　　（6）SC24 炉跡（東から）
図版 4　（7）SC44（南から）
　　（8）SC45（西から）
　　（9）SD03（南から）
図版 5　（10）SE62（北から）
　　（11）SE64（西から）
　　（12）SE64 土器出土状況（西から）
図版 6　（13）SE67（南から）
　　（14）SK31（東から）
　　（15）SK61（北から）
図版 7　出土建物（1）
図版 8　出土建物（2）
図版 9　出土建物（3）
図版 10 出土建物（4）
図版 11 出土建物（5）

第１章　はじめに

１　調査に至る経緯

平成28年２月10日付に福岡市博多区博多駅南６丁目17 - １の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群に所在し、周辺の確認調査・発掘調査において遺跡の存在が確認されている。そのため、当該地にも埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成28年３月３日に確認調査を行った。その結果、地表面から30cm下で遺物の包含層を、60～65cm下で弥生・古墳時代の遺構と遺物を確認した。これらから埋蔵文化財審査課では、遺構の保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、共同住宅建設において埋蔵文化財への影響を回避できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成28年４月28日付で事業者である株式会社ショウジュンを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年５月９日から発掘調査を行い、平成28年９月16日に終了した。

２　調査の組織

調査委託：株式会社タチカワ

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成28年度・整理報告：平成29年度）

調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

課長　常松幹雄（28・29年度）
調査第１係長　吉武学（28年度）
調査第２係長　大塚紀宜（29年度）

調査庶務：同課

管理係長　大塚紀宜（28年度）
管理係　横田忍（28年度）
文化財保護課管理調整係　松原加奈枝（29年度）

事前審査：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

事前審査係長　佐藤一郎（28年度）
本田浩二郎（29年度）
主任文化財主事　池田祐司（28・29年度）
文化財主事　大森真衣子（28年度）
中尾祐太（29年度）

調査担当：同課

主任文化財主事　瀧本正志（28年度）
文化財主事　山本晃平（28・29年度）

3　遺跡の位置と環境

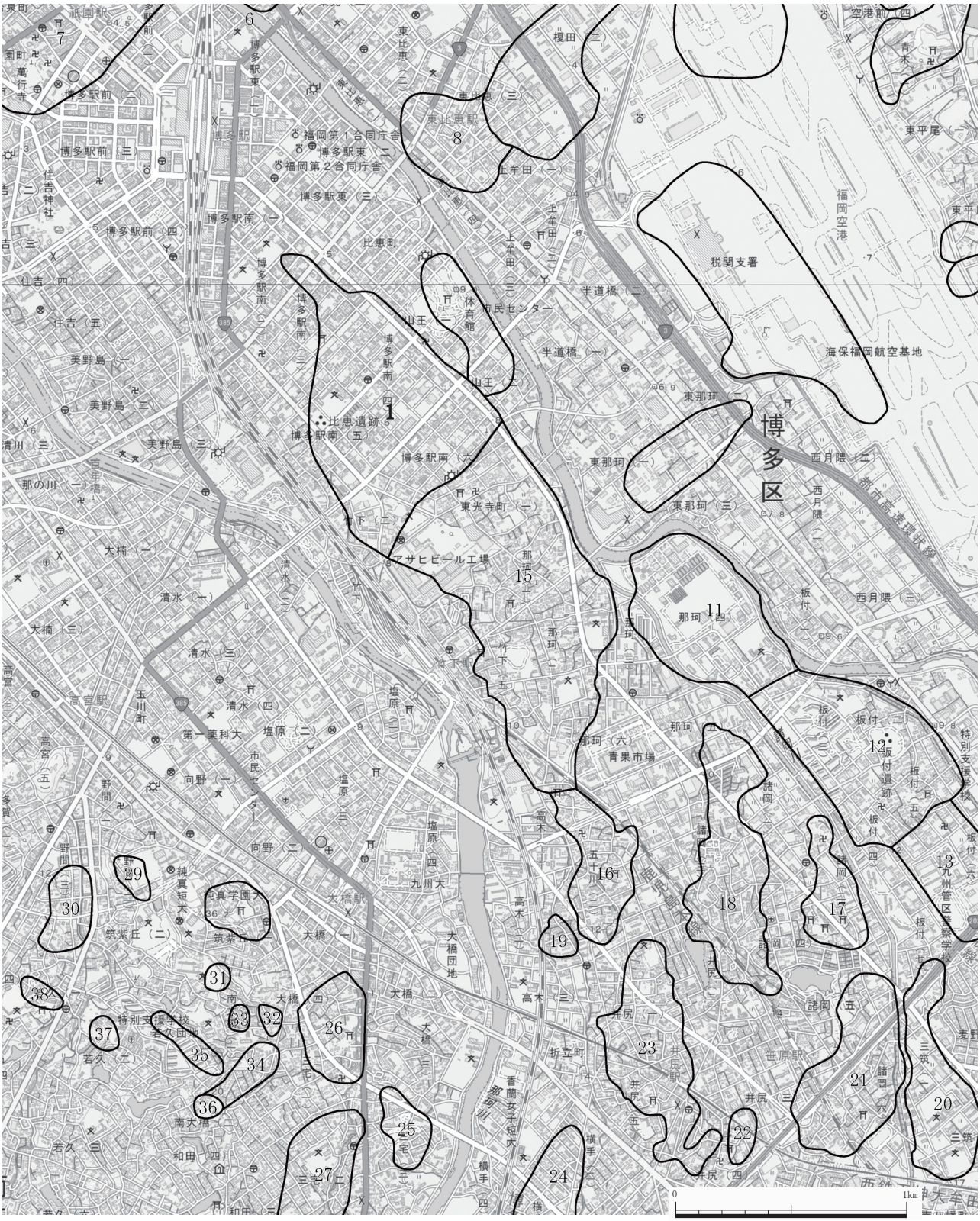
比恵遺跡群は、福岡平野のほぼ中央を博多湾に向かって北流する那珂川と御笠川に挟まれた中位段丘上に立地する。南側には浅い谷を介しながらも連続した同一丘陵上には那珂遺跡群があり、一連の遺跡群として捉えられている。一方北側には、博多遺跡群が立地し、古砂丘背面にあたる後背湿地となっている。遺跡の範囲は、那珂遺跡群と併せて南北約 2.4km、東西約 0.8km に及び、現地表面の標高は約 4.5～9m をはかる。現在は、市街地化による大規模な地形の改変により、平坦な地形となっているが、本来は狭い谷や河道が複雑に入りこむ丘陵であったことがわかってきている。

比恵遺跡群は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。旧石器時代の遺物は、遺構に伴わないがナイフ形石器が出土している。縄文時代前期には突帯文土器が出土するが、この時期の遺構は確認されていない。縄文時代晩期末から弥生時代前期になると遺構・遺物は台地北側・西側の縁辺部に多く分布し、弥生時代中期には台地のほぼ全域に遺構が展開する。中期後半には大型の円形竪穴住居が出現し、後期には台地中央部を中心とした集落が展開される。この時期には銅鏃や青銅鋤先・鉄器などが出土し、青銅器生産関連の遺物も出土するようになり、生産に携わった集団が存在していたことを示している。弥生時代中期後半から後期にかけて、単位集落を囲むように環濠と考えられる大溝の一部が確認されている。またこれとは別に地形に規制されず、丘陵上を直線的に走る並列した 2 条の溝も発見されており、これは南接する那珂遺跡群まで続いている。この溝は弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて機能した道路状遺構の側溝である可能性が指摘されている。

古墳時代後期には剣塚北古墳の造営を契機に、前方後円墳である東光寺剣塚古墳が造営されるようになる。また大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536 年）条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。

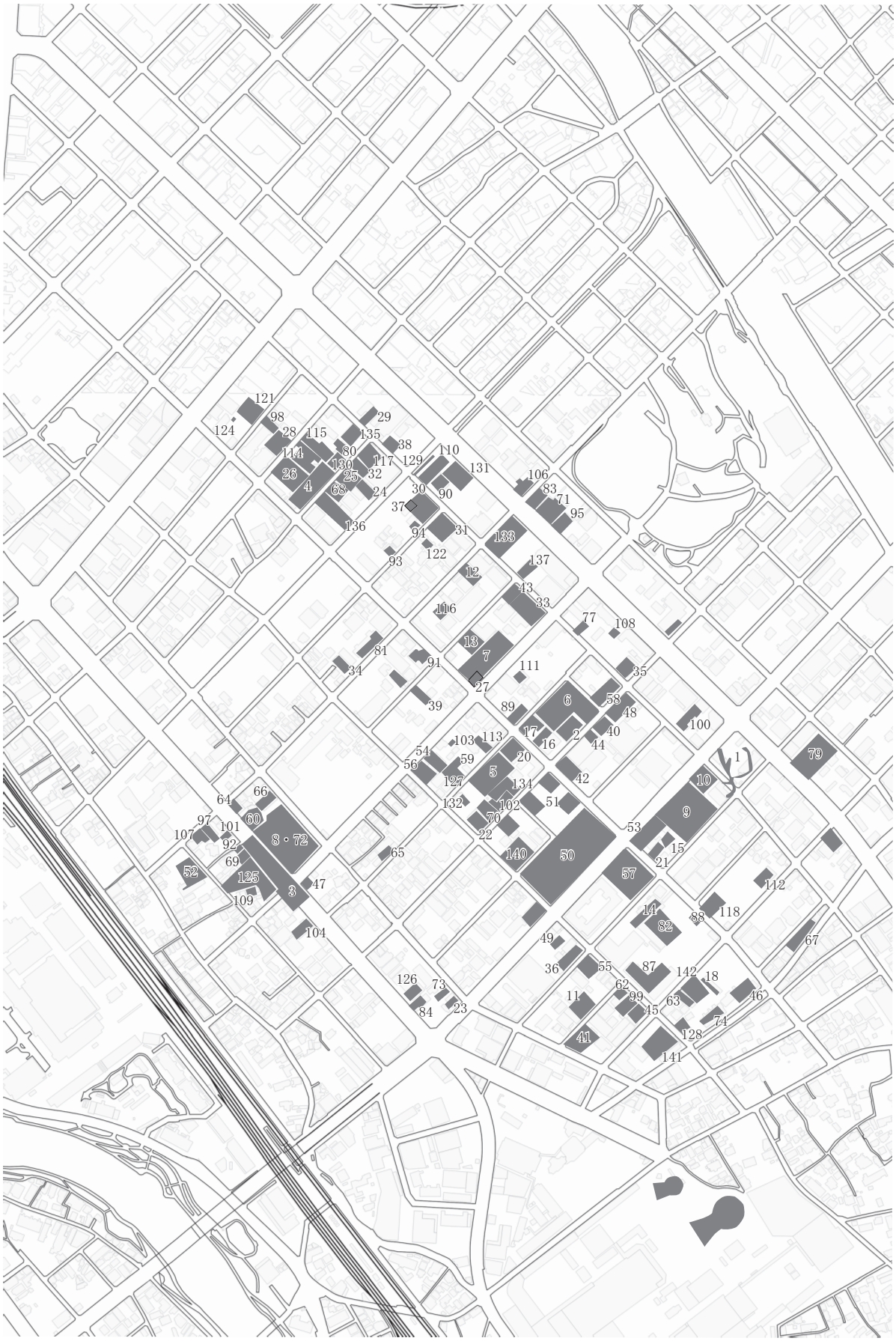
古代以降になると、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心は那珂遺跡群に移行する。

本調査地点は比恵遺跡群の中でも南側に位置し、第 18 次調査、第 63 次調査と隣接している。第 18 次調査地点では弥生時代中期の竪穴住居、土壙、貯蔵穴、弥生時代後期から古墳時代初頭の掘立柱建物、井戸、古墳時代後期の竪穴住居、掘立柱建物、古代の井戸など多くの遺構・遺物が見つかっている。第 63 次調査では、道路と思われる硬化面とそれに伴う側溝が検出され、奈良時代に比定されている。この道路は官道の推定線から離れており、それに付随する小道の一つとして考えられる。また弥生時代の井戸、竪穴住居（の可能性）、古墳時代前期初頭の井戸などが検出されている。

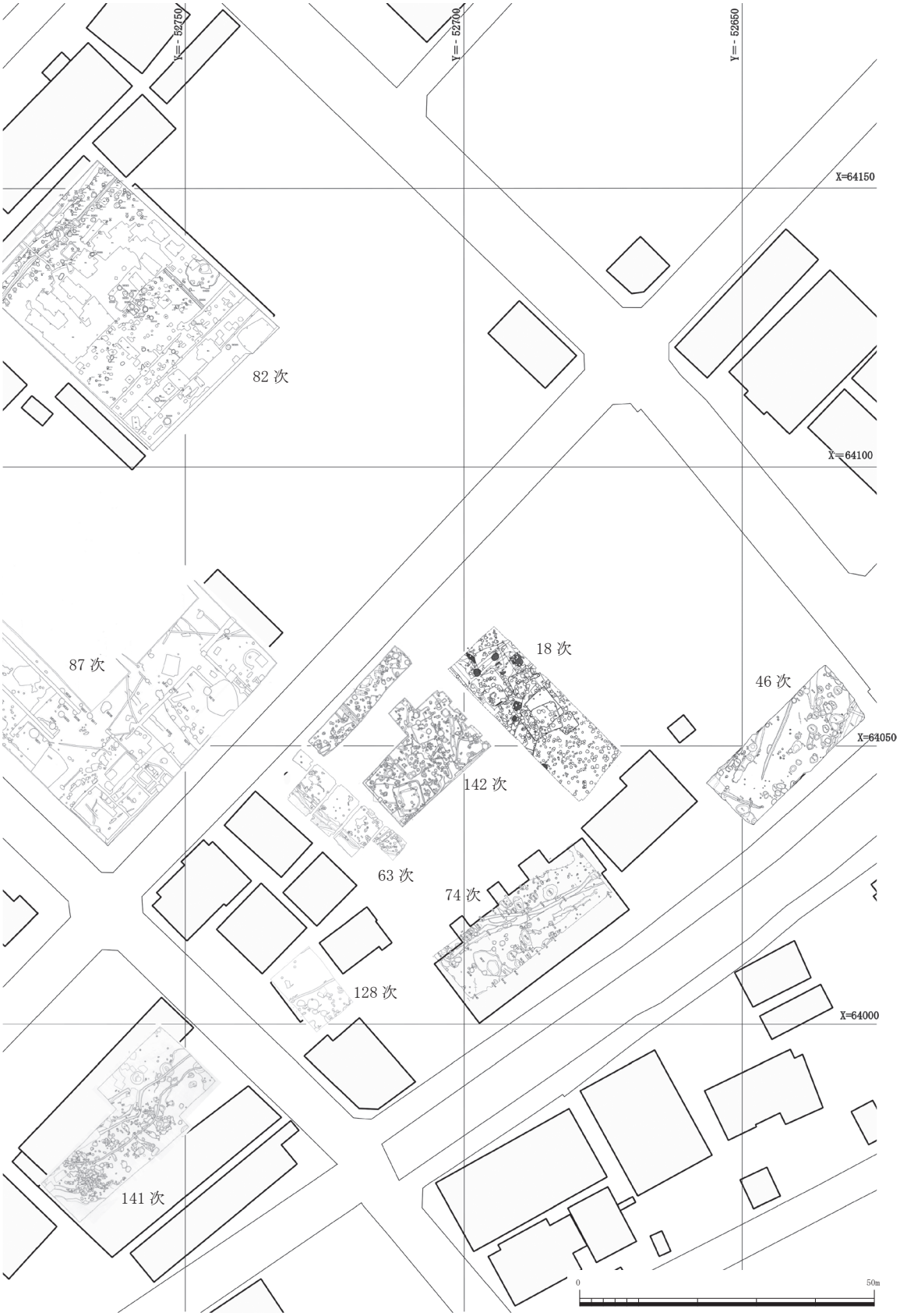


1. 比恵遺跡群　2. 上臼井遺跡　3. 席田青木遺跡　4. 久保園遺跡　5. 席田大谷遺跡　6. 吉塚遺跡　7. 博多遺跡群
8. 東比恵三丁目遺跡　9. 雀居遺跡　10. 東那珂遺跡　11. 那珂君休遺跡　12. 板付遺跡　13. 高畑遺跡　14. 山王遺跡
15. 那珂遺跡群　16. 五十川遺跡群　17. 諸岡B遺跡　18. 諸岡A遺跡　19. 井尻A遺跡　20. 三筑遺跡　21. 笹原遺跡
22. 井尻C遺跡　23. 井尻B遺跡　24. 横手遺跡　25. 三宅C遺跡　26. 大橋E遺跡　27. 三宅B遺跡　28. 野間B遺跡
29. 野間A遺跡　30. 中村町遺跡　31. 大橋A遺跡　32. 大橋D遺跡　33. 大橋C遺跡　34. 三宅A遺跡　35. 大橋B遺跡
36. 和田田蔵池遺跡　37. 若久B遺跡　38. 若久A遺跡

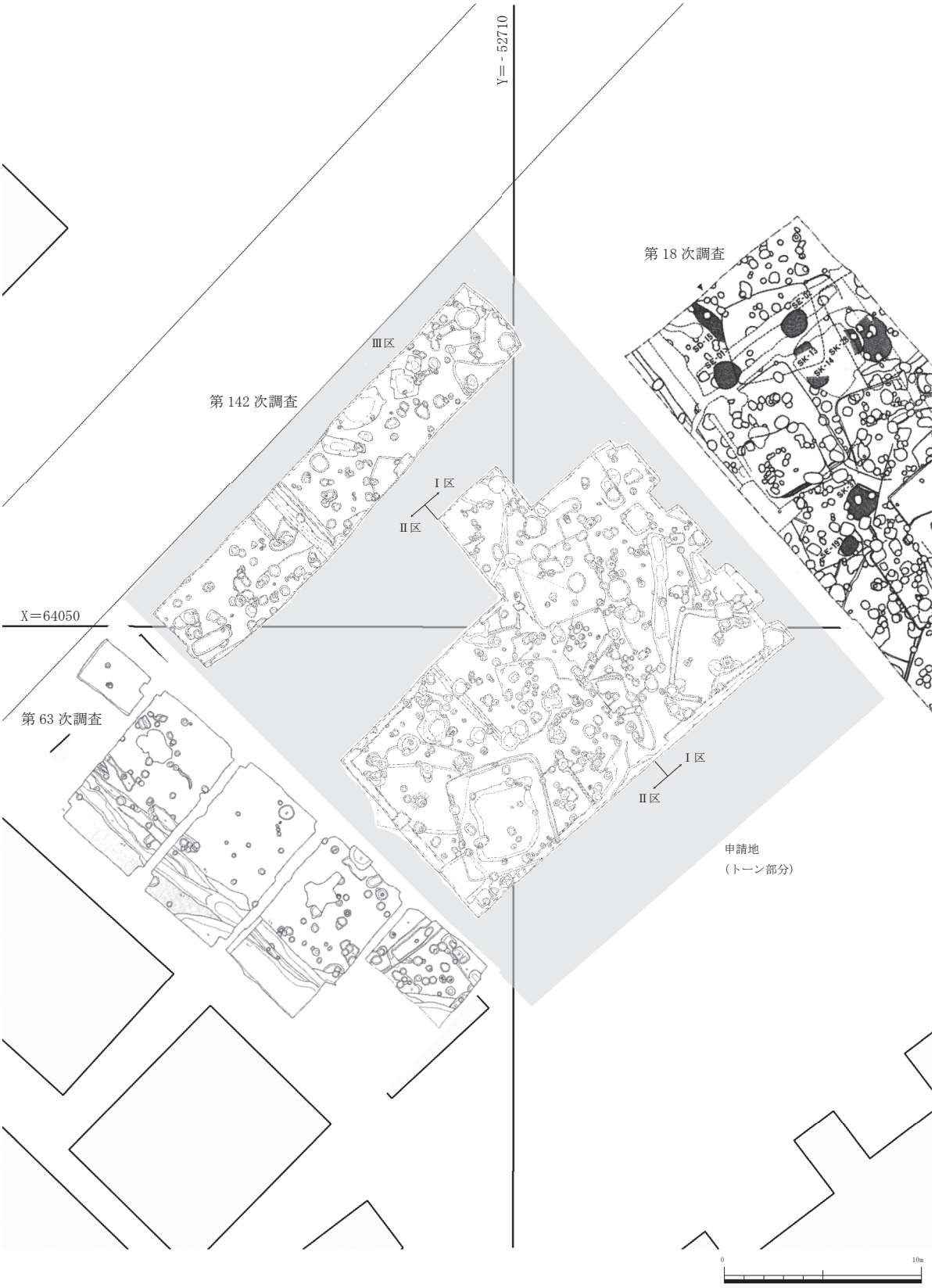
第1図　比恵遺跡群周辺遺跡分布図（1/25000）



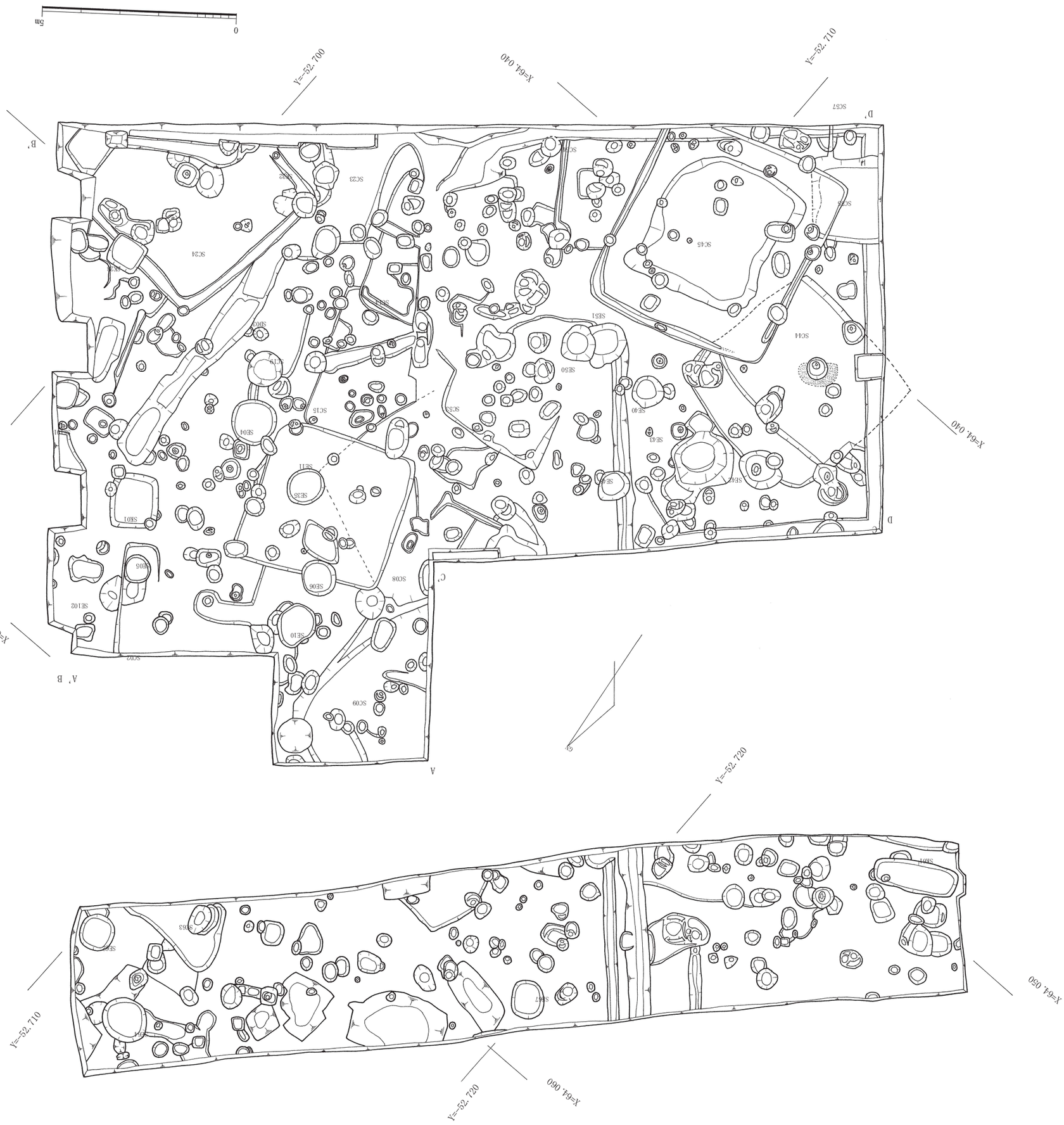
第２図　比恵遺跡群調査地点位置図（1/7500）

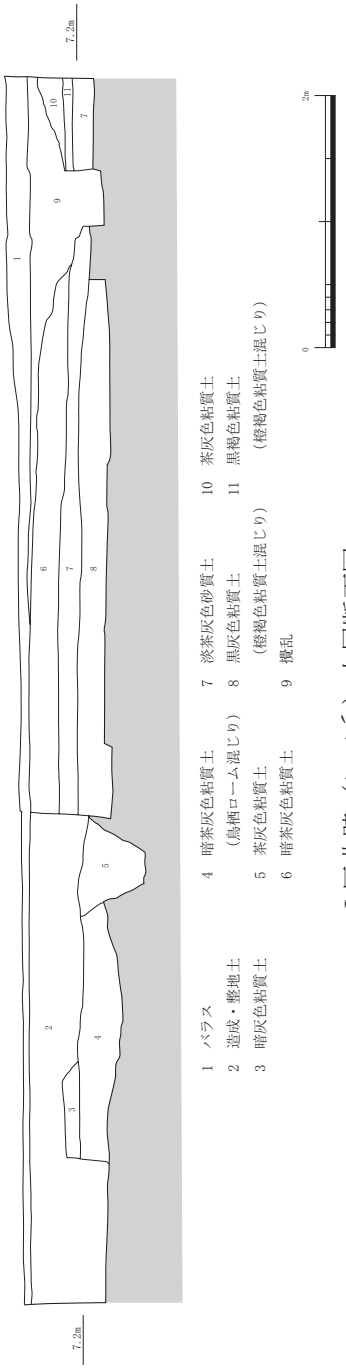


第 3 図　比恵遺跡群第 142 次調査地点周辺遺構配置図（1/1000）

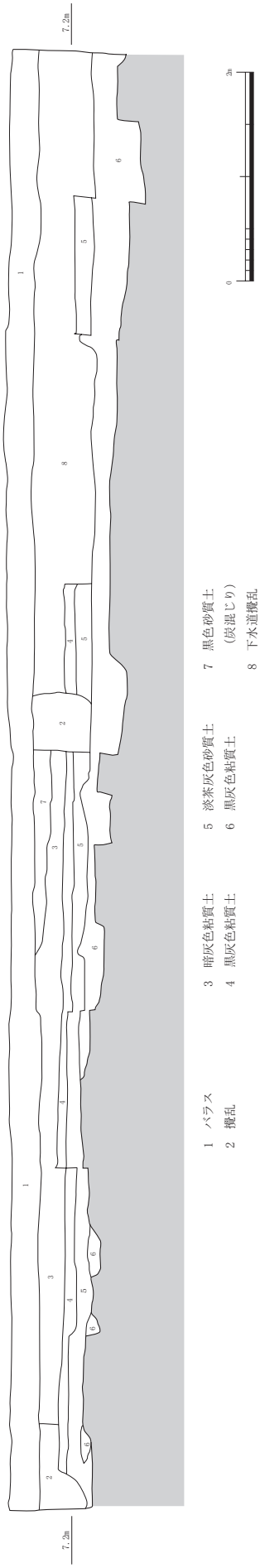


第 4 図　比恵遺跡群第 142 次調査地点調査範囲図（1/300）


X=64.060
Y=-52.720
X=64.040
Y=-52.710
SB01
SB02
SB03
SB04
SB05
SB06
SB07
SB08
SB09
SB10
SB11
SB12
SB13
SB14
SB15
SB16
SB17
SB18
SB19
SB20
SB21
SB22
SB23
SB24
SB25
SB26
SB27
SB28
SB29
SB30
SB31
SB32
SB33
SB34
SB35
SB36
SB37
SB38
SB39
SB40

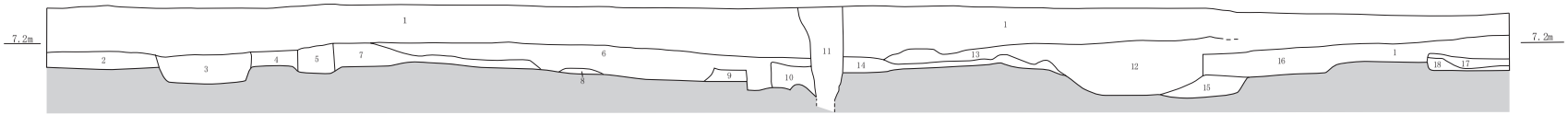


Ⅰ区北壁（A－A´）土層断面図



Ⅰ区東壁（B－B´）土層断面図

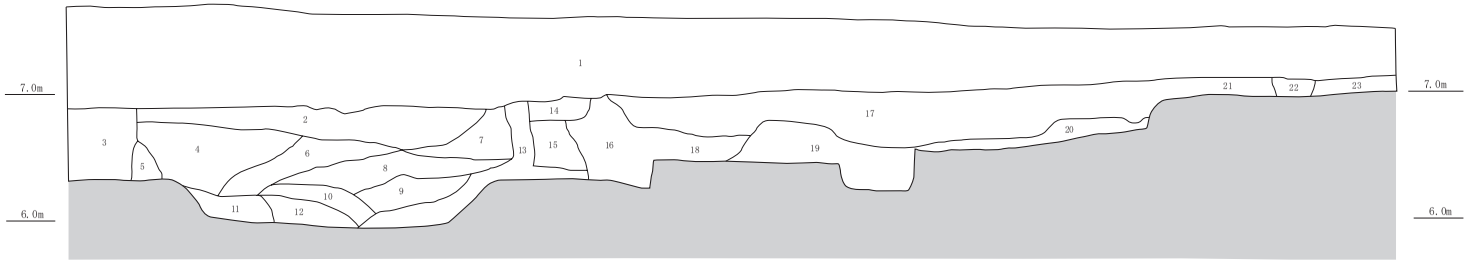
第６図　Ⅰ区土層断面図（1/60）



1　造成土
2　橙褐色ローム
3　黒褐色粘質土（ピット）
4　2と同じ
5　黒褐色粘質土（ピット）
6　暗灰褐色粘質土（橙褐色ローム含む）
7　2と同じ
8　2と同じ
9　2と同じ
10　2と同じ
11　淡灰褐色粘質土（パイプ管）
12　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを含む）
13　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを少し含む）
14　橙褐色ローム
（黒色土が少し混じる）
15　橙褐色ローム
16　暗灰褐色粘質土
17　16と同じ
18　褐色粘質土
（黒色粘質土が少し混じる。しまりが少し弱い）

0　2m

2区北壁（C－C´）土層断面図



1　造成土
2　暗灰褐色粘質土
3　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを若干含む）
4　灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを含む）
5　4と同じ
6　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを含む）
7　6と同じ
8　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを多量に含む）
9　灰褐色粘質土
（橙褐色ロームブロックを含む）
10　暗灰褐色粘質土
（小粒の橙褐色ロームを含む）
11　橙褐色ローム
12　灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを含む）
13　橙褐色ローム
（黒色土が混じる）
14　暗灰褐色粘質土
15　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを含む）
16　灰褐色粘質土
（橙褐色ロームブロック含む）
17　暗灰褐色粘質土
18　暗灰褐色粘質土
（橙褐色ロームを含む）
19　橙褐色ローム
20　19と同じ
21　19と同じ
22　黒褐色粘質土
（ピット）
23　19と同じ

0　2m

2区西壁（D－D´）土層断面図

第 2 章　調査の記録

1　調査の概要

今回報告する比恵遺跡群第 142 次調査は、福岡市博多区博多駅南 6 丁目に所在する。調査地点は比恵遺跡群の南端、比恵・那珂丘陵においては中央部に位置する。

遺構検出は重機で遺構面である鳥栖ローム上面まで剥ぎ取って実施した。遺構面は調査区の北東側で約 60～70cm 下、南西側で約 110cm 下であり、北東から南西に向かって傾斜している。調査区内に撹乱は少なく遺構が濃く見つかっている。検出遺構は掘立柱建物 1 棟、竪穴住居 16 軒、溝 1 条、井戸 17 基、土壙墓 1 基、土壙 3 基、ほか多数のピットを検出した。

発掘調査は平成 28 年 5 月 9 日から着手した。まずは重機で遺構面上面まで剥ぎ取りを行い、並行して発掘器材の搬入などを実施した。廃土置き場を確保するために調査区を 3 分割して調査を行った（第 4 図）。まずは北東側半分をⅠ区として、調査を行い、6 月 23 日に終了した。次に土砂を反転させて南西側半分をⅡ区として 6 月 27 日から調査を行い 7 月 28 日に終了した。最後に道路側部分をⅢ区として 7 月 28 日から調査を行った。そして 9 月 16 日までに発掘器材等を撤収してすべての調査を完了した。なお報告者はⅡ区調査の途中から本調査に合流した。また共に調査を行った担当者が昨年度で退職したため、Ⅰ区およびⅡ区の一部の遺構は図面と写真でしか確認ができていない。そのため一部報告としては不十分なところがあると思われる。ご寛容頂きたい。

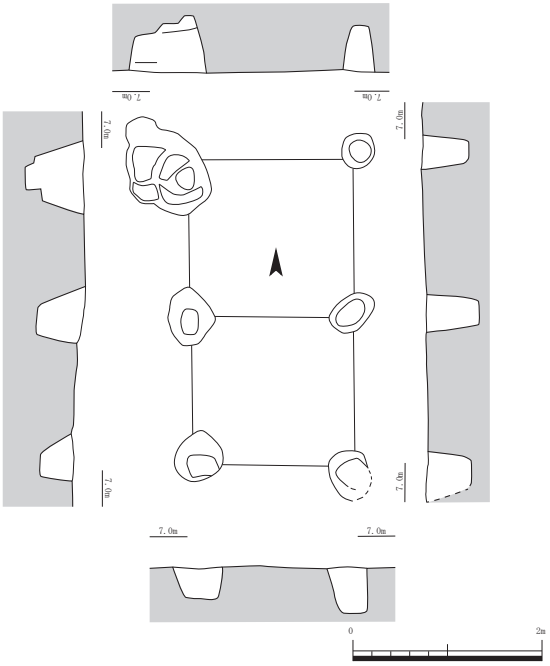
2　遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに調査遺構及び出土遺物について報告する。

1）掘立柱建物（SB）

SB01（第 8 図）

Ⅱ区調査区東側隅で確認された 1 間×2 間の掘立柱建物である。主軸方位は凡そ磁北を向く。梁行は約 200cm をはかる。桁行は約 320cm をはかり、柱間は約 160cm をはかる。柱穴の平面形は円形で径約 50cm をはかる。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片などが出土。



第 8 図　SB01 実測図（1/80）

2）竪穴住居（SC）

竪穴住居は 16 軒見つかっている。調査区内の分布を第 9 図に示している。

SC02（第 10 図）

Ⅰ区調査区北側で確認された竪穴住居である。残りが非常に悪く、一部の壁面しか確認できていない。また一部が調査区外に延びるため、全容は把握できない。遺存する規模は、南北長 280cm、東西長 75cm。壁面は約 5cm 遺存。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片、須恵器片などが出土。

SC07（第 9 図）

Ⅰ区調査区北東側で確認された。今回は住居として報告するが、遺存状況が非常に悪く、また報告者も図面と写真でしか確認ができていないため、竪穴住居とするには少し疑問が残る。遺存する規模は南北長約 200cm のみである。**出土遺物**　弥生土器片、須恵器片、黒曜石などが出土。

SC09（第 10 図）

Ⅰ区調査区の北西側で確認された竪穴住居である。調査区の端で検出されたため、一部が調査区外に延びている。また他の遺構などで切られており、残りは良くない。遺存する規模は、南北長約 300cm、東西長約 50cm。壁面は約 10cm 遺存。床面でピットを多数確認しているが、主柱穴は不明。**出土遺物（第 14 図）** **1・2** は須恵器の坏蓋。**1** は口径 14.5cm、器高 4.5cm。口縁端部に段を持っている。天井部は回転ヘラ削りを行っており、他は回転ナデ。焼成は良好。胎土は 0.5～5mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰色。**2** は口径 15.2cm、器高 4.8cm。口縁端部に段を持っており、また天井部と口縁部の境に 2 条の沈線を持つ。天井部外面は回転ヘラ削りを行っており、天井部内面には同心円状の当て具痕。他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～2mm 程の砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙～灰黄色。**3・4** は須恵器の坏身。**3** は口径 12.1cm、最大径 14.7cm、器高 4.6cm。口縁部の立ち上がりが 1.5cm で長い。底部は回転ヘラ削りを行っている。他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～3mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰色。4 は口径 13.0cm、最大径 15.6cm、器高 4.9cm。2 とセットになるか。底部外面は回転ヘラ削りを行っており、内面は同心円状の当て具痕がある。他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～3mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰白色～黄灰色。他に土師器の高坏、甕片などが出土している。

SC08（第 9 図）

Ⅰ区西側で確認された竪穴住居である。SC11 に切られている。またⅠ区とⅡ区の境で検出されたが、Ⅱ区では続きを確認できなかった。そのため全容は把握できていない。**出土土器**　弥生土器片、土師器片、須恵器片などが出土。

SC11（第 11 図）

Ⅰ区の中央やや西側で確認した方形の竪穴住居である。SC08 より新しい。SE06 に切られている。南北長約 390cm、東西長約 400cm。壁面は 15～20cm 程度遺存。壁溝は確認されなかった。床面でピットを確認できたが、主柱穴は不明。**出土遺物（第 14 図）**　**5～7** はガラス小玉。**5** は径 0.3cm、厚さ 0.3cm、孔径 0.1cm。コバルトブルー。**6** は径 0.35cm、厚さ 0.25cm、孔径 0.1cm。緑色。**7** は径 0.25cm、厚さ 0.18cm、孔径 0.1cm。茶色。**10** は管玉。長さ 1.3cm、径 0.3cm、孔径 0.1cm。緑色凝灰岩製。**11** は石製の勾玉。一部破損している。長さ 2.69cm、幅 1.55cm、厚さ 0.35cm 孔径 0.15cm。オリーブ灰。他に土師器片、須恵器片が出土。

SC14（第 10 図）

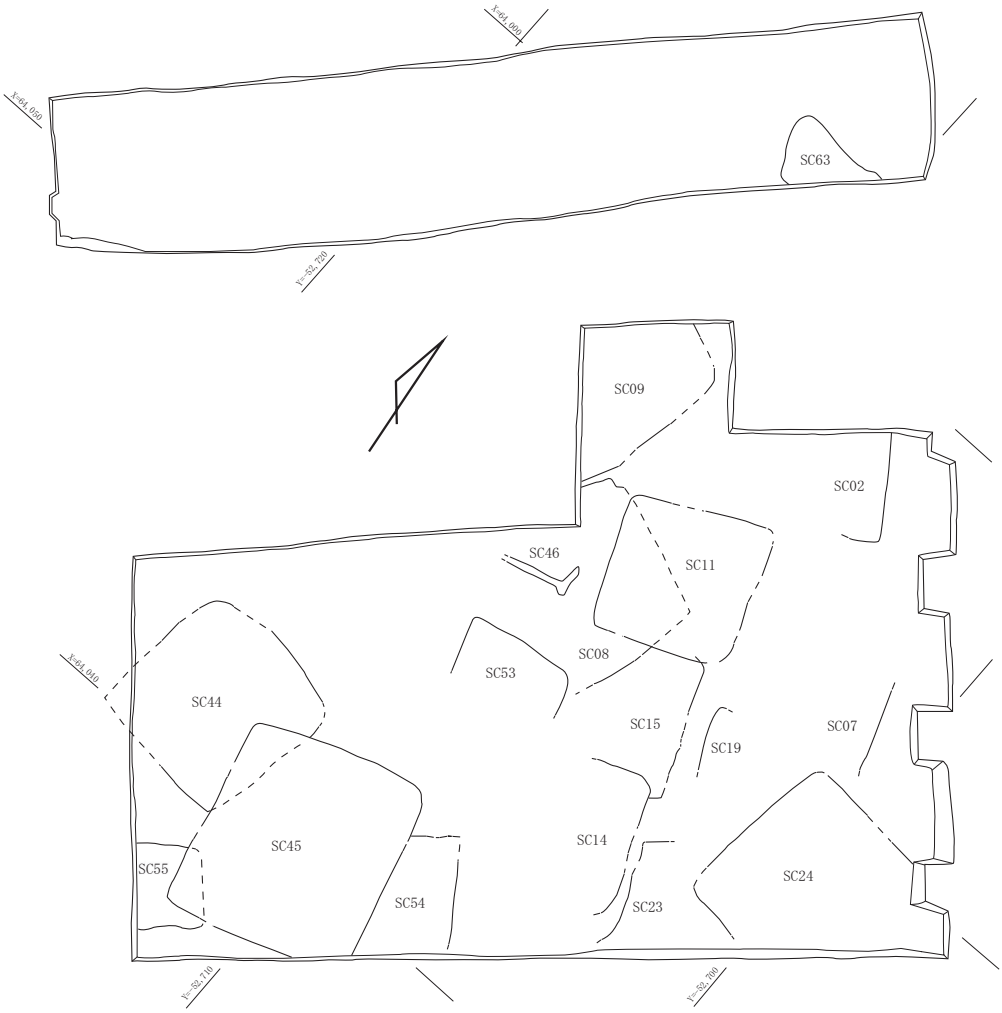
Ⅰ区南側で確認された竪穴住居である。Ⅰ区とⅡ区の境で確認されたが、Ⅱ区でその続きは確認できなかった。確認できた規模は、南北長 370cm、東西長 155cm。壁面は 10cm 程度遺存。西壁にて幅約 15cm、深さ約 5cm の壁溝と思われる溝を検出している。**出土遺物**　弥生土器片が出土している。

SC15・ SC19・SC23（第 9 図）

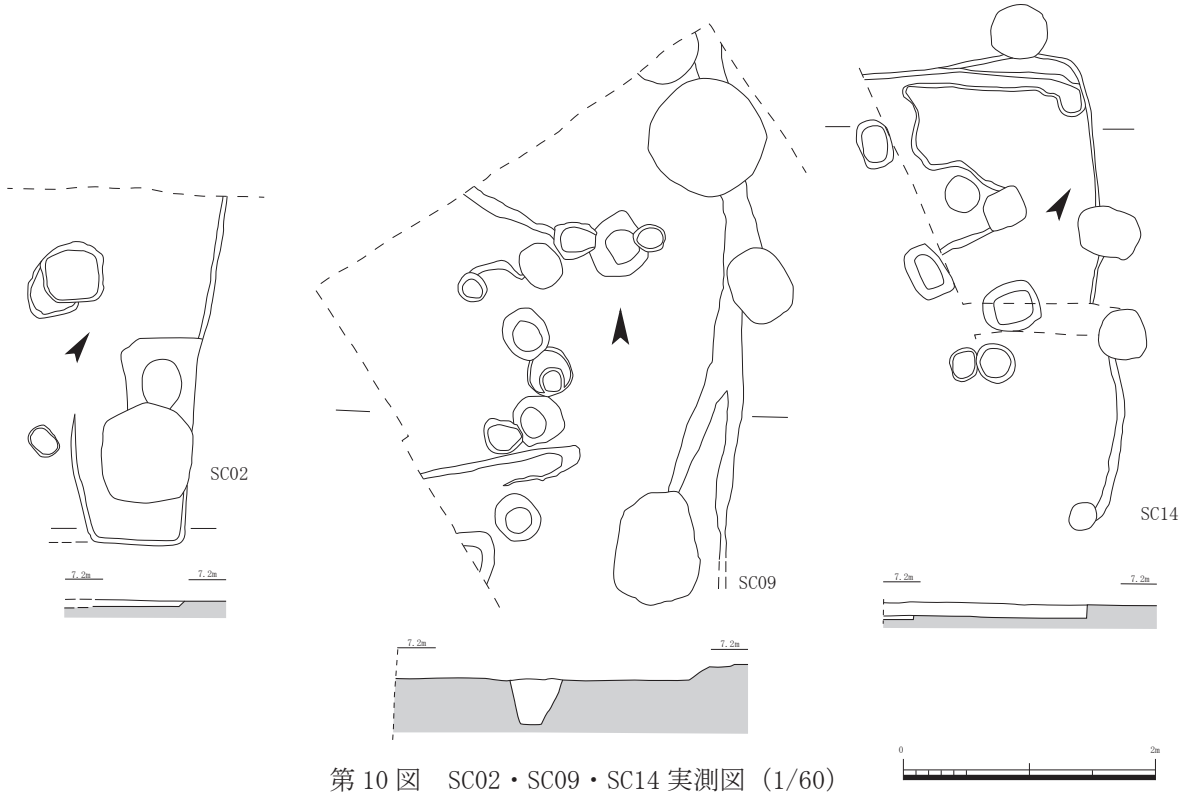
Ⅰ区調査区南側で確認された。竪穴住居とされているが、写真ではよくわからないため、疑問が残る。**出土土器**　弥生土器片が出土している。

SC24（第 11 図）

Ⅰ区調査区東側で確認された竪穴住居である。調査区の端で検出されたため、一部が調査区外に延びている。南北長約 460cm、東西長約 350cm。壁面は 5cm 程度遺存。また幅 20～30cm、深さ 9～12cm の壁溝が巡っている。住居の中央付近には径 60cm 程の炉があり、周囲にも焼土が見つかっている。主柱穴は不明であ



第 9 図　竪穴住居分布図（1/200）



第 10 図　SC02・SC09・SC14 実測図（1/60）

る。**出土土器**　弥生土器片、古式土師器片が出土。

SC44（第 13 図）

Ⅱ区調査区南側で確認された竪穴住居である。SC45 に切られている。南北長約 440cm、東西長約 440cm。壁面は 15cm 程度遺存。北側に幅 110cm のベッド状遺構がある。また住居の中心に焼土が検出されていることから炉があったと考えられる。主柱穴は P1、P2 の 2 本柱である。　**出土遺物**　弥生土器片が出土。

SC45（第 12 図）

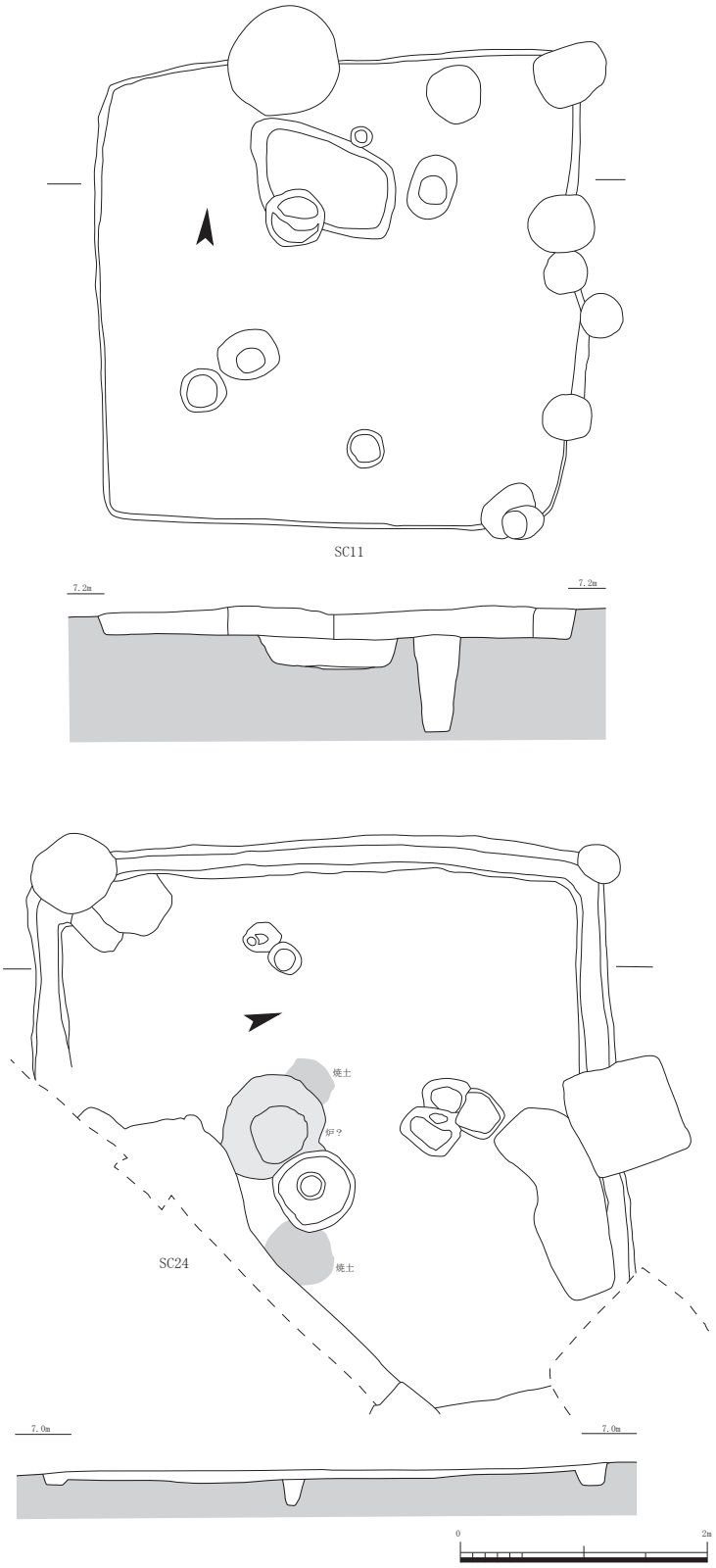
Ⅱ区調査区南側で確認された方形の竪穴住居である。南北長約 540cm、東西長約 500cm。壁面は 20cm 程度遺存。また幅約 10～30cm、深さ約 8～15cm の壁溝が巡っている。幅 50～80cm のベッド状遺構がロの字状に存在する。床面でピットを検出しているが、主柱穴は不明である。**出土遺物（第 14 図）**　12 は石製の勾玉。長さ 1.7cm、幅 1.1cm、孔径 0.15cm、厚さ 0.51cm。色調は浅黄色～オリーブ黄色。他に弥生土器片、古式土師器片が出土。

SC46（第 12 図）

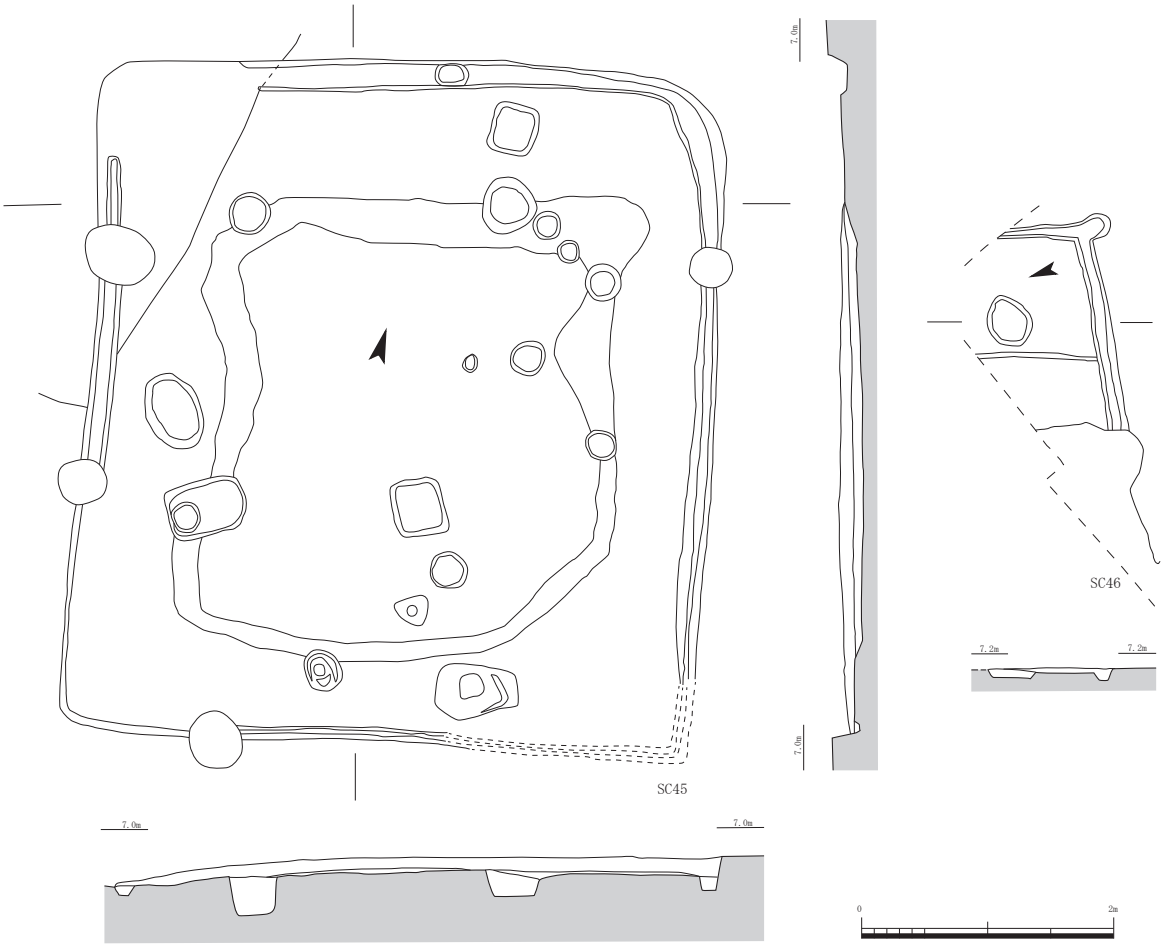
Ⅱ区調査区の北側で確認された竪穴住居である。残りが非常に悪く、壁溝と思われるものが遺存している。壁溝は幅約 15cm、深さ 6～10cm。**出土遺物**　土師器片、須恵器片が出土。

SC53（第 13 図）

Ⅱ区調査区北側で確認された竪穴住居である。遺存状況は悪い。確認できる規模で、南北長約 155cm、東西長約 280cm。壁面は 5



第 11 図　SC11・SC24 実測図（1/60）



第 12 図　SC45・SC46 実測図（1/60）

～15cm 程度遺存。壁溝は確認されなかった。主柱穴は 4 本柱であると考えられる。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片が出土。

SC54（第 13 図）

Ⅱ区調査区南東側で確認された竪穴住居である。SB01 と SC45 に切られている。また一部が調査区外に延びている。そのため全体像は把握できなかった。確認できる規模は南北長約 285cm、東西長約 130cm。壁面は 7cm 程度遺存。壁溝は東側のみ確認でき、幅約 15cm、深さ約 6～8cm。主柱穴は不明。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片が出土。

SC55（第 13 図）

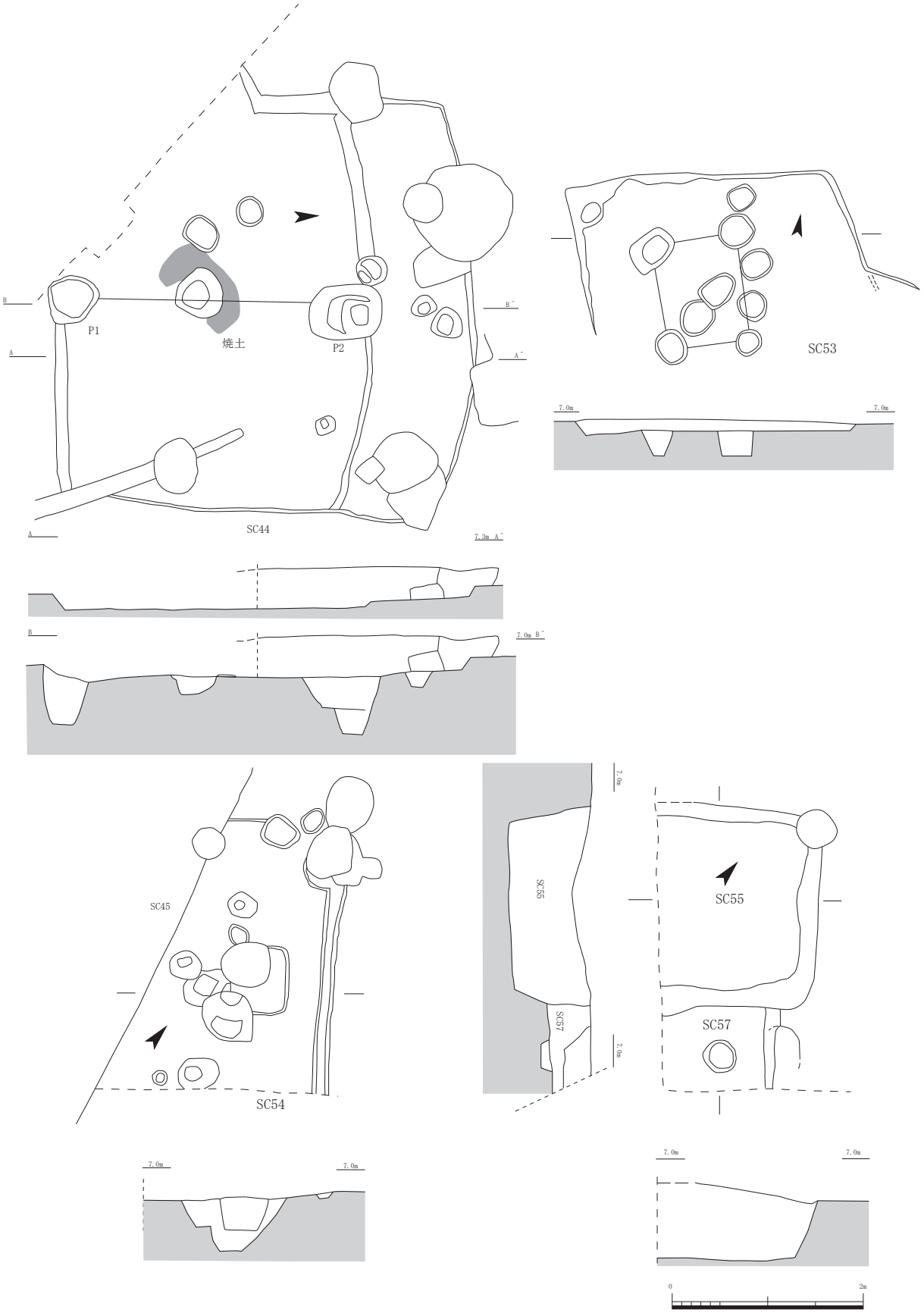
Ⅱ区調査区南側で確認された竪穴住居である。SC45 に切られ、SC57 を切っている。一部が調査区外に延びている。規模は南北長約 220cm 東西長約 170cm。壁面は 95cm 程度遺存。壁溝やピットは確認されなかった。**出土遺物**　弥生土器片が出土。

SC57（第 13 図）

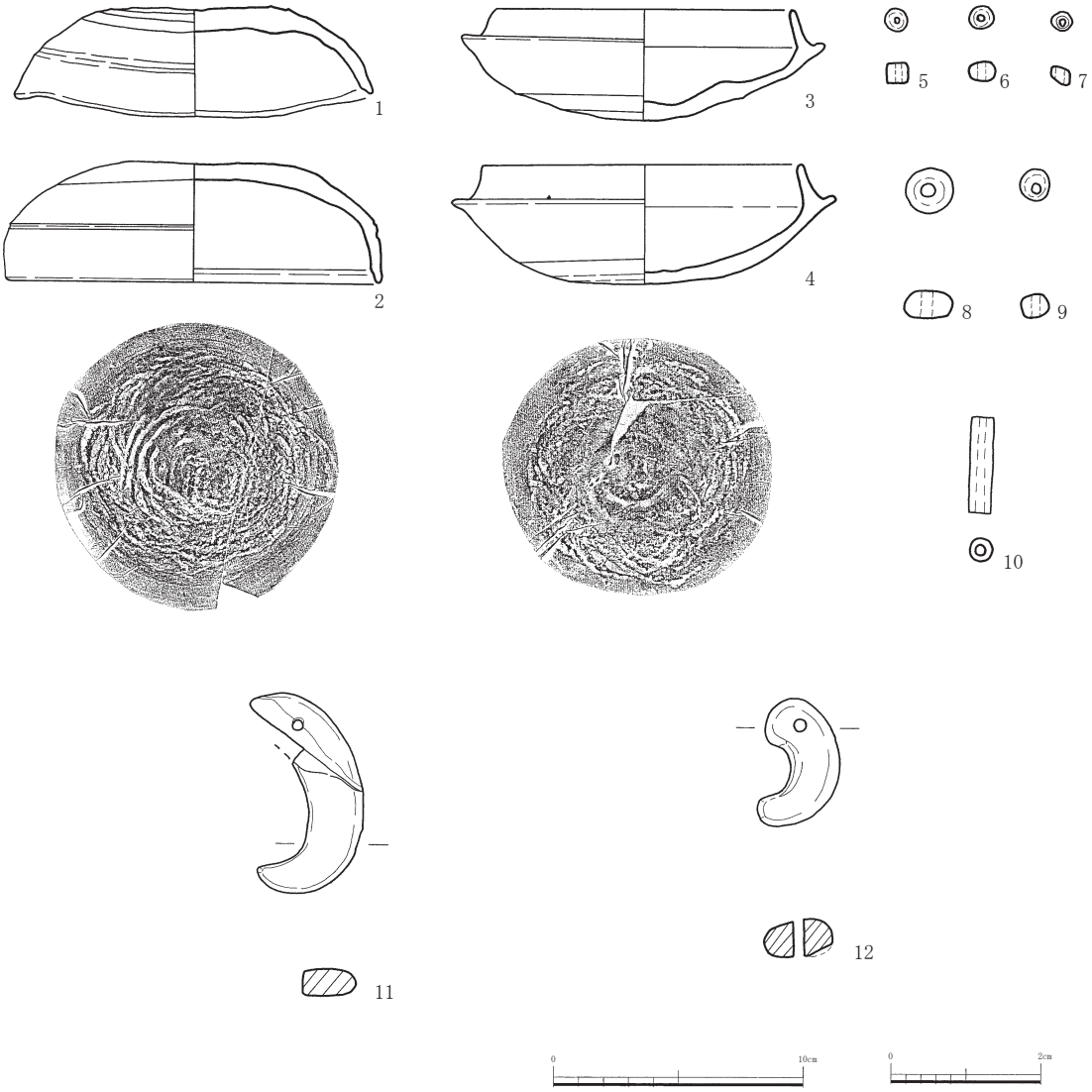
Ⅱ区調査区南側で確認された。SC55 に切られ、一部が調査区外に延びており、確認できた部分は少ない。そのため竪穴住居としての根拠は少ないが、ここでは住居として報告する。壁面は 95cm 程度遺存。壁溝やピットは確認されなかった。**出土遺物**　弥生土器片が出土。

SC63（第 9 図）

Ⅲ区調査区北側で確認された。壁面は 16cm 程度遺存。壁溝やピットは確認されなかった。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土。



第 13 図　SC44・SC53・SC54・SC55・77 実測図（1/60）



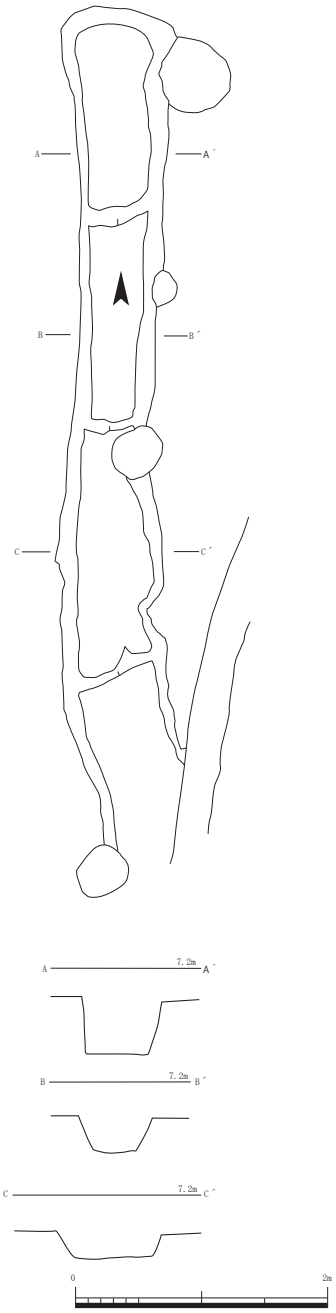
第 14 図　竪穴住居出土遺物（1~4：1/3, 5~12：1/1）

3）溝

SD03（第 15 図）

Ⅰ区調査区西側で確認された南北方向に延びる溝である。調査区内での全長は約6.8m、幅60～85cmをはかる。南から北に向かって深くなっている。**出土遺物（第 16 図）**　**13～15** は須恵器の坏蓋。**13** は口径 14.5cm、器高 4.2cm。天井部と口縁部の境に沈線を持つ。口縁端部は段を持たず、丸く収まる。天井部は回転ヘラ削りを行っており、他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～6.5cm 程の砂粒を多く含む。色調は灰色。**14** は口径 14.4cm、器高 4.5cm。天井部と口縁部の境に沈線を持ち、口縁端部に段を持っている。天井部は回転ヘラ削りを行っており、他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～2mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰黄色。**15** は口径 13.9cm、器高 4.1cm。天井部は回転ヘラ削りを行っており、緑褐色及び灰オリーブ色の自然釉が付着している。他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～3mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰色。**16・17** は須恵器の坏身。**16** は口径 12.8cm、最大径 15.0cm、器高 3.8cm。口縁部は立ちあがりが 1.5cm と長く、端部は丸く収まる。底部はヘラ削りで、他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～2mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰白色～灰色。**17** は口径 11.6cm、最大径 14.0cm、器高 3.9cm。口縁部の立ち

上がりが 1.7cm と長い。底部は回転ヘラ削りで、他は回転ナデ調整である。焼成は良好。胎土は0.5〜3mm程の砂粒を多く含む。色調は灰色。**18** は須恵器の高坏。脚部がほとんど残っておらず、坏部のみ。坏部の口径は 10.8cm、残存高は 4.7cm。坏部の内面には灰白色の自然釉が付着している。また体部には刺突文が巡っている。調整は回転ナデ。脚部には3方の透かしがある。焼成は良好。胎土は0.5〜1mm程の砂粒を多く含む。色調は灰色〜灰白色。**19** は土師器の高坏。須恵器の形を模したものと考えられる。口径は13.7cm、残存高は 12.1cm。坏部の底部は回転ヘラ削りで、他は回転ナデ。脚部外面上半はカキ目と思われる調整で、下半はタテ方向のナデを施している。内面下半はナデで、上半にしぼり痕。焼成は良好。胎土は0.5〜3mm程の砂粒を多く含む。色調は浅黄緑色〜にぶい黄橙色。**20** は弥生土器の壺。口径は9.4cm、器高10.4cm。表面が粗く摩滅しているため、調整は不明。焼成は良好。胎土は1〜4mm 程の砂粒を含む。色調はにぶい黄橙色〜にぶい黄褐色。**21** は須恵器の甕。口径 23.1cm、残存する高さ 7.0cm。口縁部は回転ナデであるが、一部にカキ目がある。また内面に自然釉が付着している。体部外面は格子目叩きで内面に同心円状の当て具痕がある。焼成は良好。胎土は1〜3mm程の砂粒を少し含む。焼成は灰色〜灰白色。



第 15 図　SD03 実測図（1/60）

4）井戸

井戸は17基検出している。調査区内の分布を第17図に示している。ただⅠ・Ⅱ区の多くの井戸は崩落の危険を考えて、完掘をしていない。

SE04（第17図）

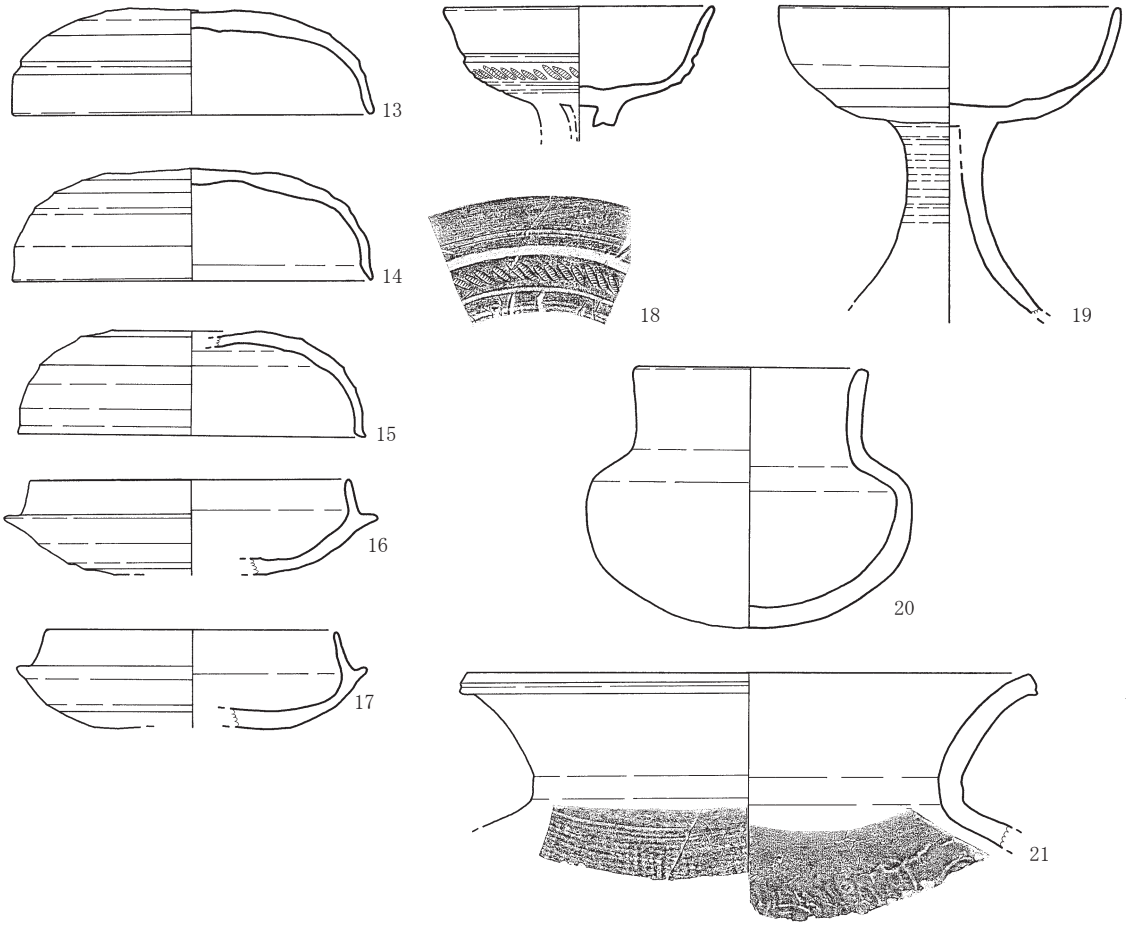
Ⅰ区調査区中央付近で確認した径 1.1m の井戸である。深さ不明。**出土遺物**　弥生土器の甕片、器台片、高坏片（丹塗り）が出土。

SE05（第18図）

Ⅰ区調査区北側で確認した径 70〜80cm の井戸である。深さは80cm以上。**出土遺物**　弥生土器の壺片、器台片、甕片や須恵器片などが出土。

SE06（第17図）

Ⅰ区調査区西側で確認された径80cm程の井戸である。深さ不明。**出土遺物（第20図）**　**22** は須恵器の坏蓋。口径 12.8cm、器高 4.5cm。天井部と口縁部の境に段を持ち、また口縁端部にも段を持つ。天井部は回転ヘラ削りで、他は回転ナデ調整。焼成は良好。胎土は0.5〜1mm程の砂粒を少し含む。色調は灰白色。**23** は須恵器の坏身。口径11.0cm、最大径13cm、器高5.1cm。口縁部の立ち上がりが長く、端部が外反する。底部は回転ヘラ削りで他は回転ナデ調整。24は弥生土器の甕。口径11.6cm、器高14.9cm。口縁部にはヨコナデを、体部から底部外面にかけてはナデの後ハケ目調整。また黒班もある。体部内面は



第 16 図　SD03 出土遺物（1/3）

ヘラナデで、工具痕が見える。底部内面には指圧痕。焼成は良好。胎土は 1～5㎜ 程の砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色。

SE10（第 17 図）

Ⅰ区調査区西側で確認された径 1m程の井戸である。深さ不明。**出土遺物**　弥生土器の壺片、器台片が出土。

SE35（第 17 図）

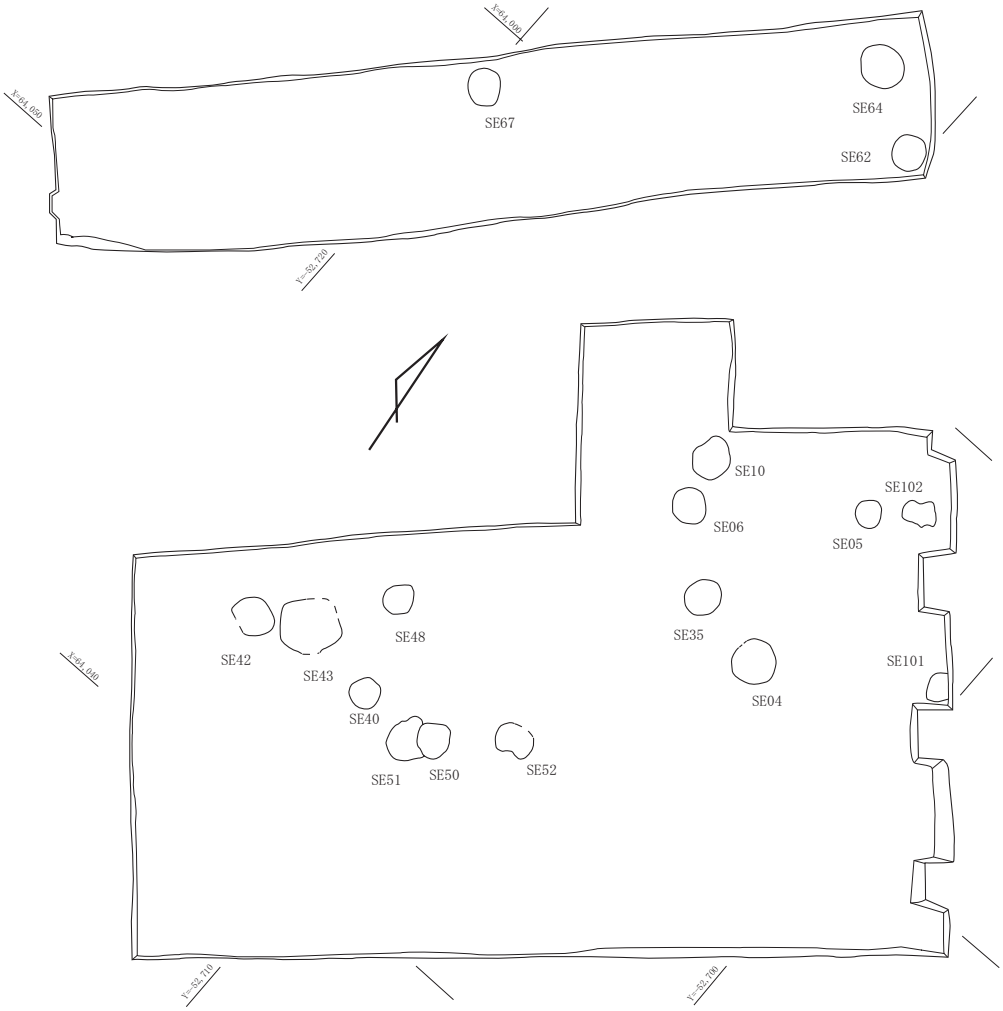
Ⅰ区調査区中央付近で確認された径 90cm の井戸である。深さ不明。**出土遺物**　弥生土器片が出土。

SE101（第 18 図）

Ⅰ区調査区東側で確認された径 80cm の井戸である。深さは約 70cm 以上。一部が調査区外に延びている。**出土遺物**　土師器片が出土。

SE102（第 18 図）

Ⅰ区調査区北側で確認された 90×55cm 程の不整形の井戸である。深さは 1m。**出土遺物（第 20 図）**　25 は土師器の壺。口径 24.6cm、器高 12.2cm。体部外面には羽状文が施されており、内面にはヘラ削り。他はヨコナデ調整。焼成は良好。胎土は 0.5～3㎜ 程の砂粒を多く含む。色調は浅黄色～暗灰黄色。26・27 は土師器の甕。26 は口径 14.9cm、器高 19.7cm。調整は、底部外面はヨコハケで、体部はタテハケで、頸部付近で一度ヨコハケを行っている。内面はヘラ削りで表面が粗く摩滅している。口縁部はヨコナデ。焼成は良



第 17 図　井戸分布図（1/200）

好。胎土は 1～3㎜ 程の砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色。**27** は口径 20.1㎝、器高 21.1㎝。調整は底部外面から体部下半までナナメ方向のハケ目調整で、上半はヨコハケ。内面はヘラ削りだが、表面が粗く摩滅しているため、調整が不明。底部内面には指圧痕あり。焼成は良好。胎土は 0.5～3㎜ 程の砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色～浅黄橙色。**28** は弥生土器の二重口縁壺か。頸部径 10.1㎝、体部最大径 34.7㎝、残存高は 27.0㎝。底部外面はタテハケ。体部外面はヨコハケで、一部をナデ消しているか。内面底部～体部はナナメハケ。一部摩滅している。底部付近に黒班。体部～頸部にかけて丹塗りが施されている。焼成は良好。胎土は 1～3㎜ 程の砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色。

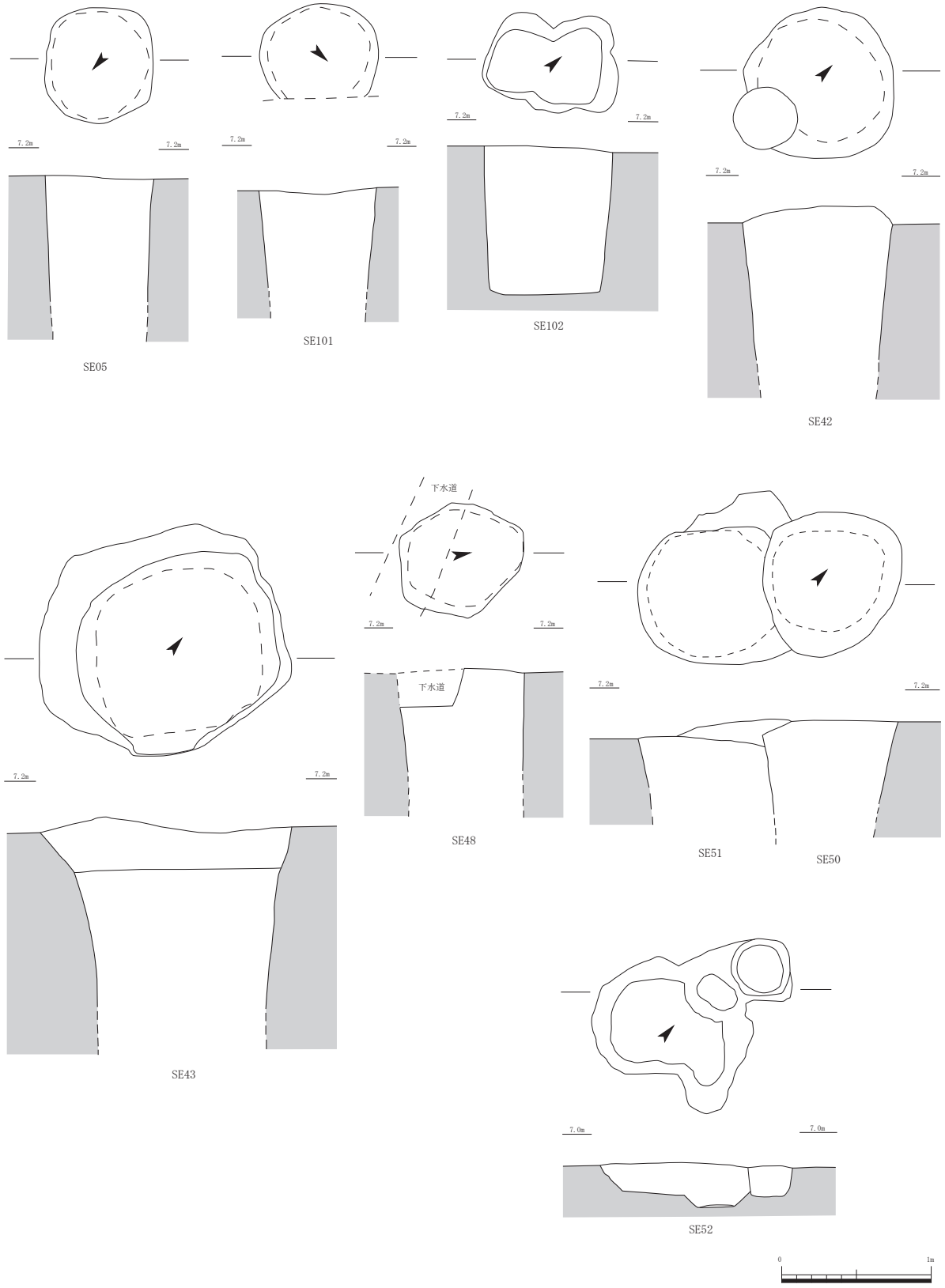
SE40（第 17 図）

Ⅱ区中央で確認された径 80㎝ 程の井戸である。深さ不明。**出土遺物（第 22 図）**　36 は土製の支脚。器高 11.1㎝、受部径 4.4㎝、裾部径 8.1㎝。全体はナデで指押さえの痕跡がある。焼成は良好。胎土は砂粒を含む。色調は黄褐色。他に弥生土器片、土師器片が出土。

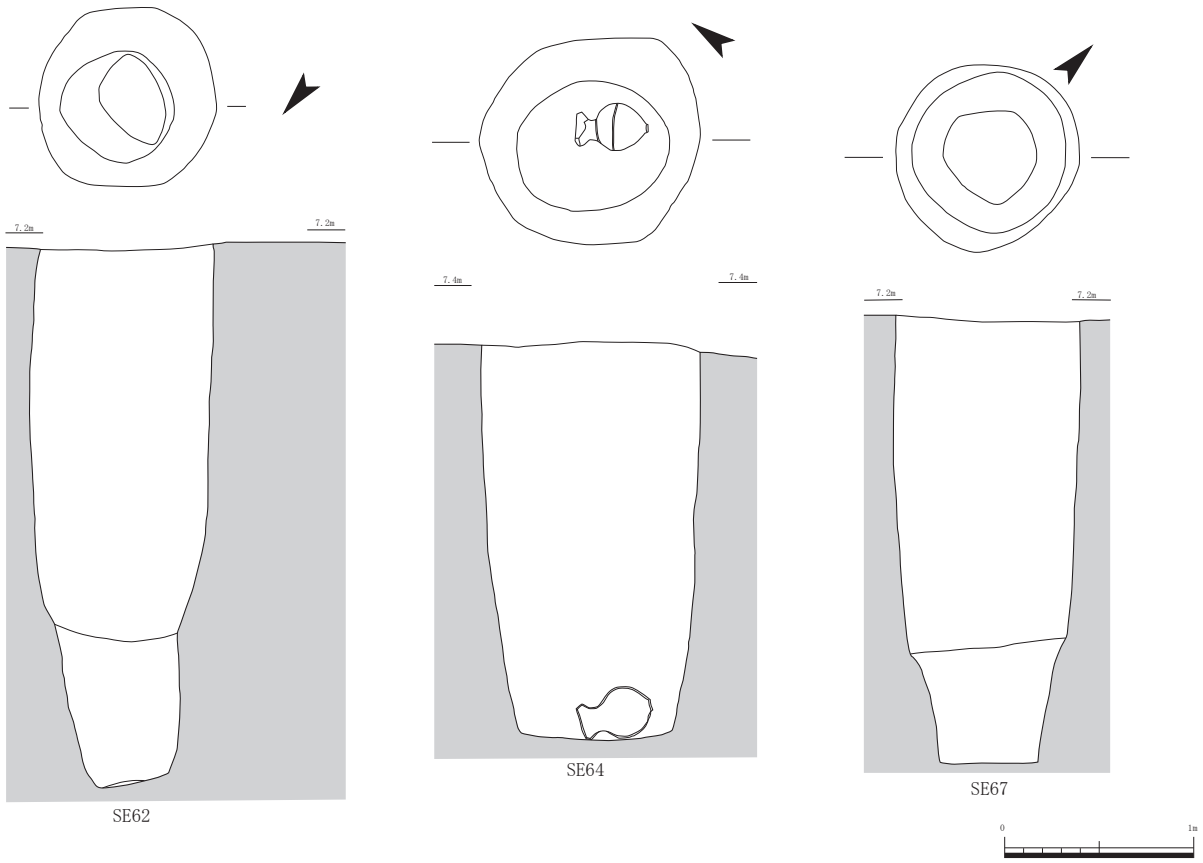
SE42（第 18 図）

Ⅱ区調査区西側で確認された径 1m 程の井戸である。深さは 90㎝ 以上。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片が出土。

SE43（第 18 図）



第 18 図　井戸実測図［1］（1/40）



第 19 図　井戸実測図［2］（1/40）

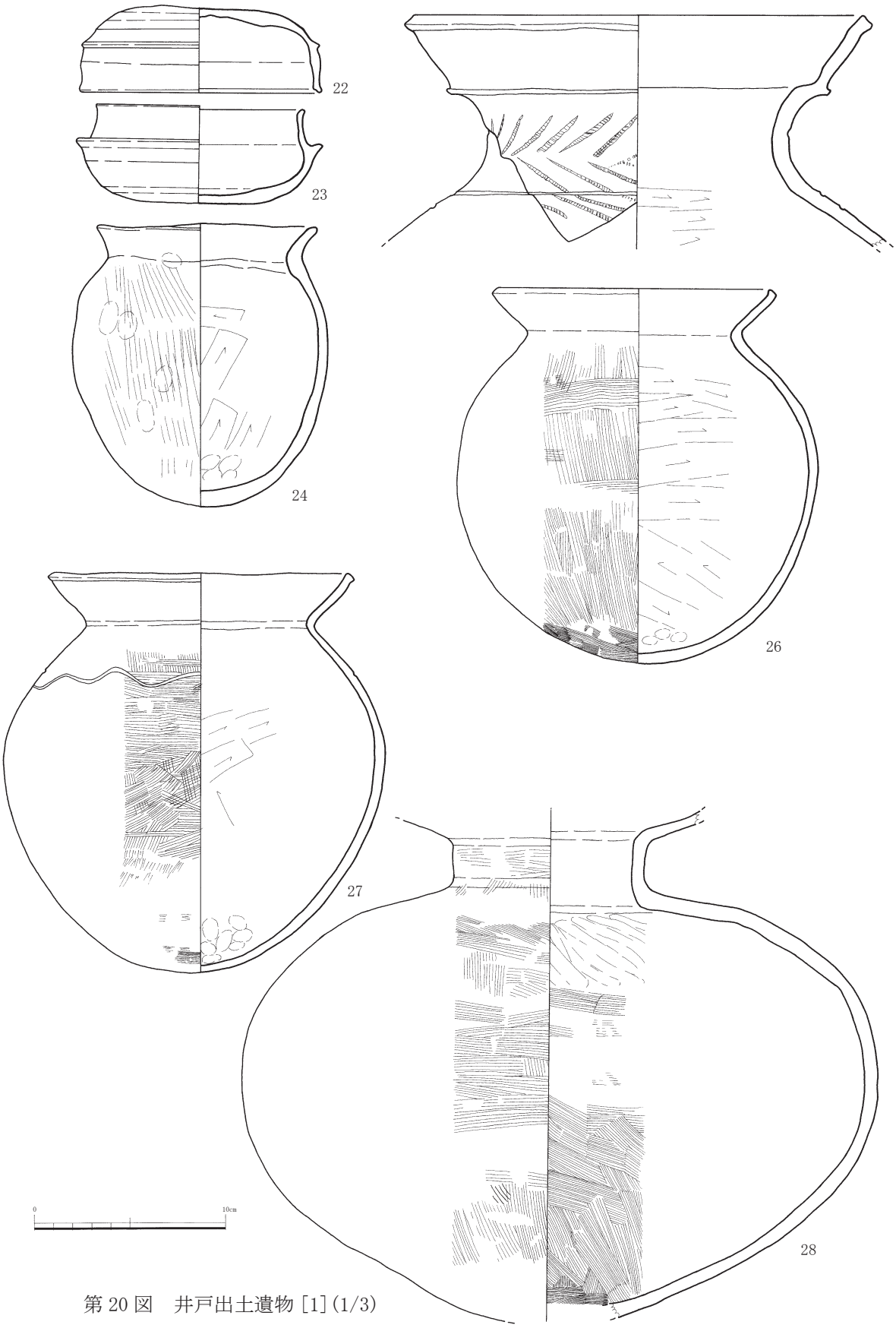
Ⅱ区調査区西側で確認された径 1.5m 程の井戸である。深さは 110cm 以上。**出土遺物（第 22 図）**　37～39 は土製の投弾。37 は長さ 4.3×幅 2.3×厚さ 2.3cm。焼成は良好。胎土は小砂粒。色調は橙褐色。38 は長さ 4.3×幅 2.2×厚さ 2.2cm。焼成は良好。胎土は小砂粒と金雲母を含む。色調は淡黄灰褐色。39 は長さ 4.9×幅 2.3×厚さ 2.2cm。焼成は良好。胎土は微砂粒と金雲母を含む。色調は灰褐色。

SE48（第 18 図）

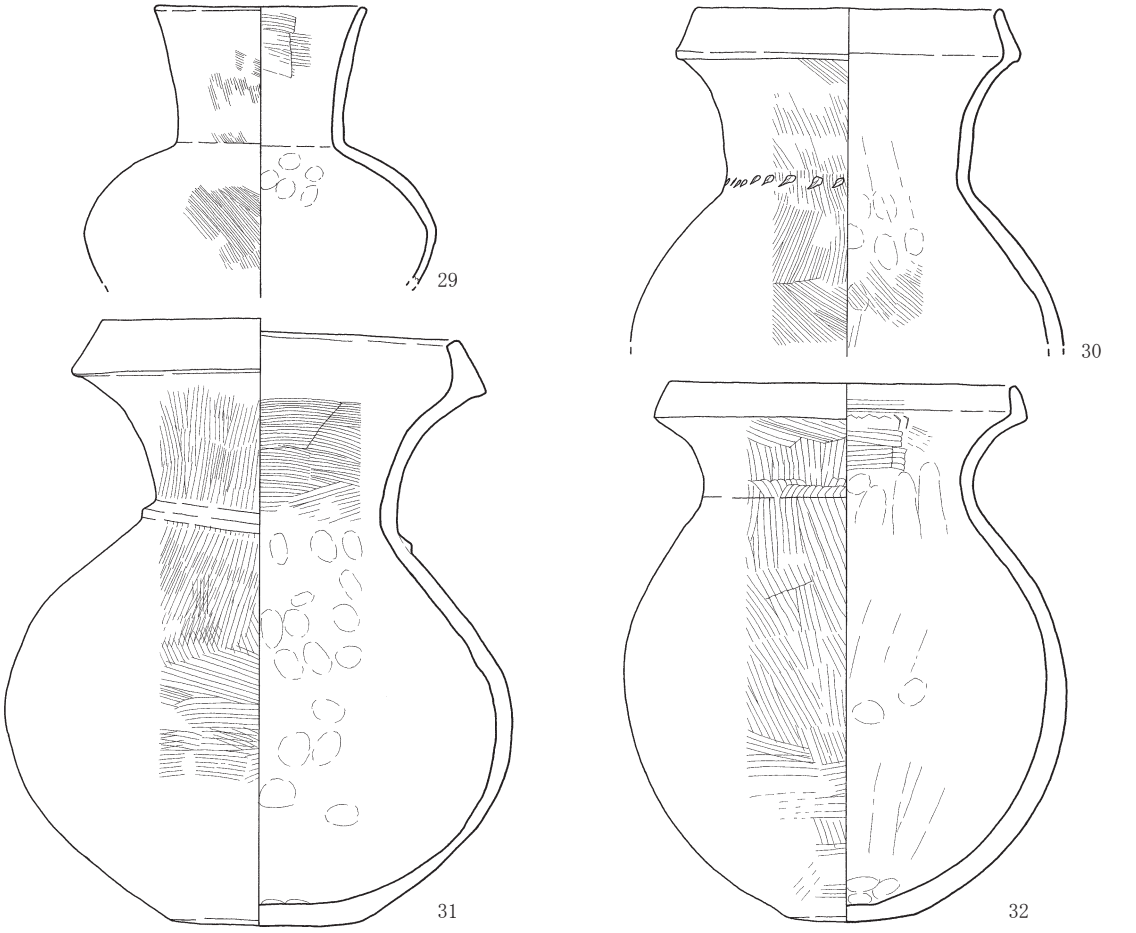
Ⅱ区調査区西側で確認された径 80cm 程の井戸である。深さは 60cm 以上。**出土遺物**　弥生土器片、土師器片が出土。

SE50（第 18 図）

Ⅱ区調査区中央で確認された径 90～100cm 程の井戸である。SE51 を切っている。深さは 50cm 以上。**出土遺物（第 21・22 図）**　29 は弥生土器の長頸壺。口径 8.5cm、器高 9.1cm。胴部～頸部外面はナナメハケ。口縁部～頸部内面にはヨコハケ。胴部内面はナデ。胴部外面に黒班あり。焼成は良好。胎土は 1～4mm 程の砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色。30～35 は弥生土器の二重口縁壺。30 は口径 12.4cm、残存高さ 13.4cm。胴部～頸部外面にかけてナナメハケ～タテハケ。口縁部外面～頸部内面までヨコナデ。胴部内面は上半がタテハケ後ナデ、下半がナナメハケ。焼成は良好。胎土は 0.5～2mm 程の砂粒を多く含む。色調は灰白色～灰黄色。31 は口径 14.3cm、底径 7.7cm、器高 24.3cm。胴部下半はナデ、上半から頸部にかけてタテハケ。頸部に貼り付け突帯。頸部内面はヨコハケ。胴部内面はナデと指圧痕。焼成は良好。胎土は 1～3mm 程の砂粒を含む。色調は淡黄色。32 は口径 13.9cm、底径 5.2cm、器高 21.6cm。胴部～頸部外面ハケ目。頸部内面は指圧痕。胴部内面はヨコハケとヘラナデ、工具痕もあり。焼成は良好。胎土は 0.5～3mm の砂粒を含む。



第 20 図　井戸出土遺物 [1] (1/3)



第 21 図　井戸出土遺物 [2] (1/3)

色調はにぶい黄橙色。**33** は口径 13.0cm、底径 7.4cm、器高 24.8cm。胴部～頸部外面はハケ目のちにナデ消し。胴部下半に黒班あり。口縁部はヨコナデ。頸部内面はヨコハケ。胴部内面はナナメハケ。焼成は良好。胎土は 1～3mm の砂粒を多く含む。色調は淡黄色～灰黄色。**34** は口径 12.5cm、底径 7.2cm、器高 32.8cm。胴部外面はタタキのちヘラナデのちケズリとタタキのちナデのちミガキがある。頸部外面はタタキのちミガキ。頸部内面はヘラナデとタテナデ。胴部内面はタタキとヘラナデ。焼成は良好。胎土は 0.5～2mm の砂粒を多く含む。色調は淡黄色～にぶい黄橙色。**35** は口径 14.1cm、底径 5.6cm、器高 30.7cm。胴部～頸部外面はハケ目。口縁部はヨコナデ。頸部内面はハケ目で指圧痕あり。胴部内面は上からヘラナデ→ナデ→ハケ目、指圧痕あり。焼成は良好。胎土は 1～5mm の砂粒を多く含む。色調は浅黄色。

SE51（第 18 図）

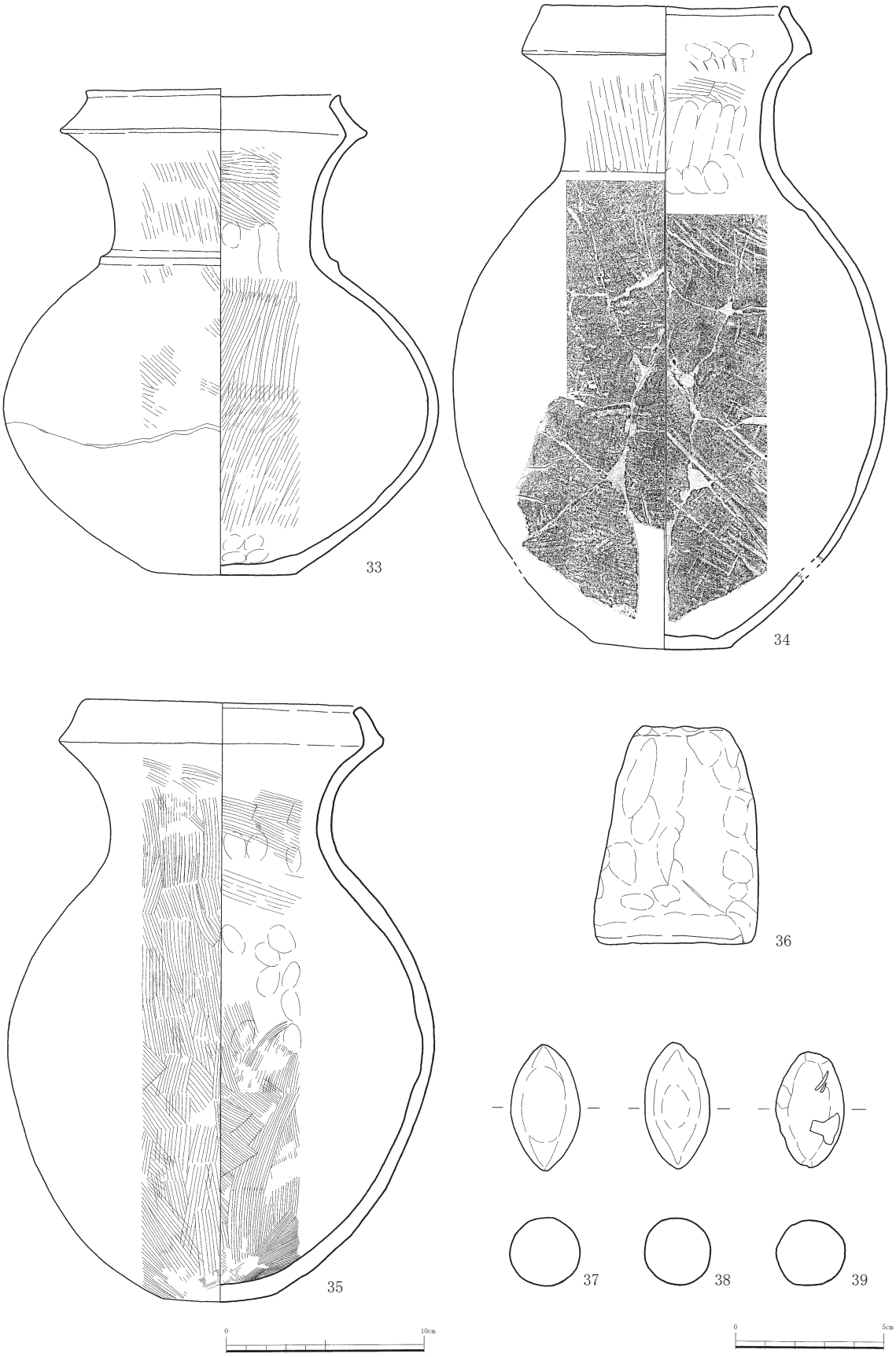
Ⅱ区調査区中央で確認された径 90cm 程の井戸である。SE50 に切られている。深さは 30cm 以上。

SE52（第 18 図）

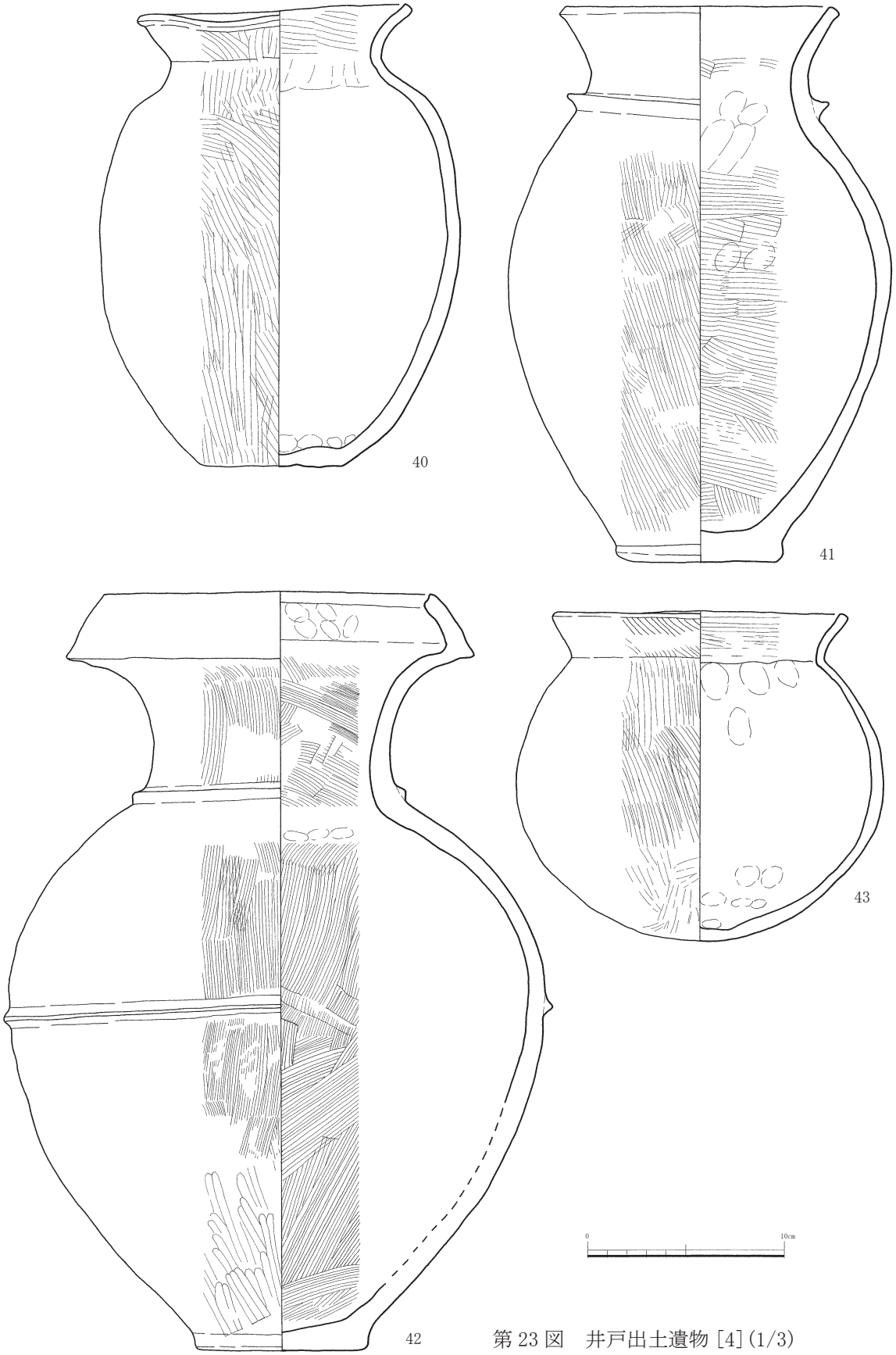
Ⅱ区調査区中央やや東側で確認された不整形な井戸である。概ね径 1m、深さ 30cm。

SE62（第 19 図）

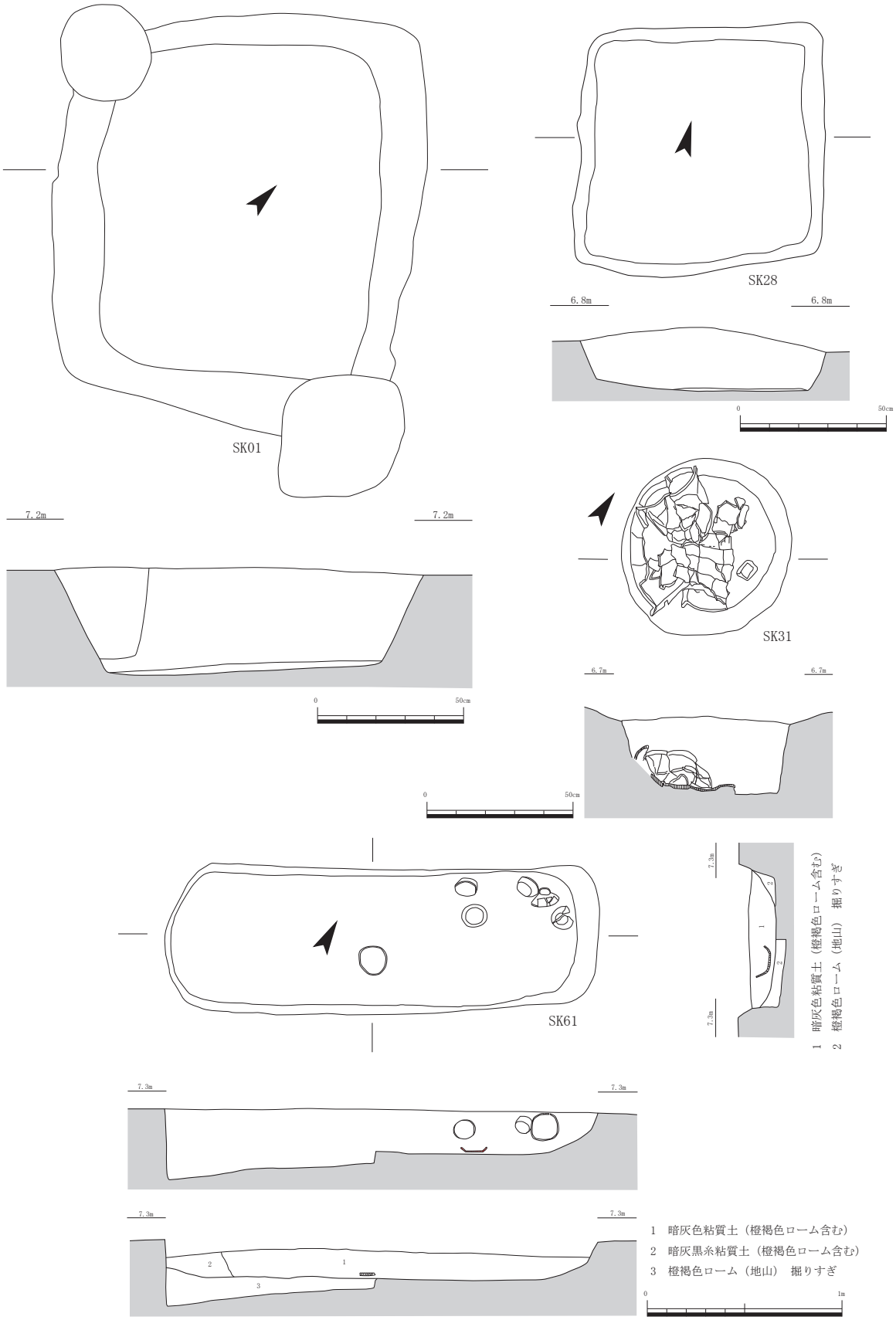
Ⅲ区調査区北東隅で確認された径 90cm、深さ 290cm の井戸である。八女粘土まで掘り込まれている。**出土遺物（第 23 図）**　**40・41** は弥生土器の壺。**40** は口径 14.1cm、底径 7.4cm、器高 23.5cm。底部はヘラナデ。胴部～頸部内面までハケ目。胴部内面はヘラナデ。焼成は良好。胎土は砂粒と金雲母含む。色調はや



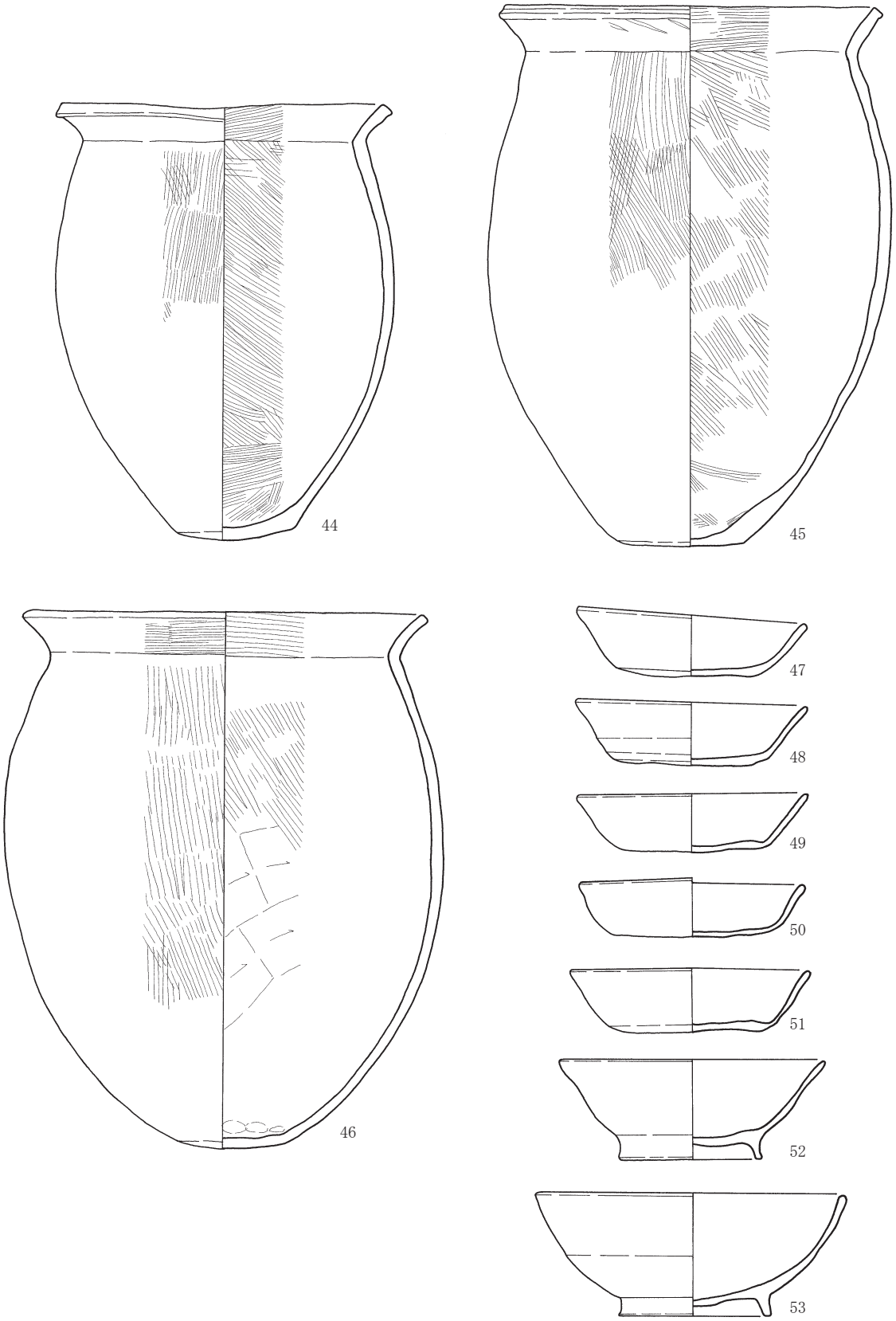
第 22 図　井戸出土遺物 [3] (35~37:1/3, 38~41:1/2)



第 23 図　井戸出土遺物 [4] (1/3)



第 24 図　土坑実測図（SK61 は 1/30・それ以外は 1/20）



第 25 図　土坑出土遺物 (1/3)

や淡明橙色。41 は口径 14.3cm、底径 8.6cm、器高 28.5cm。頸部に貼り付け突帯。胴部外面はタテハケ。頸部～口縁部外面はヨコナデ。頸部内面はナデ。胴部内面はヨコハケ。焼成は良好。胎土は 0.5～4mm の砂粒を含む。色調は橙色。

SE64（第 19 図）

Ⅲ区調査区北側で確認された径 110cm、深さ 210cm の井戸である。底から弥生土器の壺が出土している。**出土遺物（第 23 図）**　42 は弥生土器の二重口縁壺。口径 16.6cm、底径 8.8cm、器高 38.9cm 胴部と頸部に貼り付け突帯。胴部外面下半はタテ方向の研磨。上半～頸部外面はタテハケ。頸部～胴部内面はナナメハケ。焼成は良好。胎土は 1～3mm の砂粒を含む。色調は浅黄色。

SE67（第 19 図）

Ⅲ区調査区中央で確認された径 90cm、深さ 240cm の井戸である。八女粘土まで掘り込まれている。**出土遺物（第 23 図）**　43 は弥生土器の壺。口径 15.2cm、底径 3.5cm、器高 16.9cm。胴部下半はミガキ。上半～頸部外面はナナメハケ。頸部内面はヨコハケ。胴部内面はナデ、指圧痕あり。焼成は良好。胎土は 0.5～2mm の砂粒を含む。色調は橙色～褐色。

5）土壙（墓）

SK01（第 24 図）

Ⅰ区調査区北側で確認された方形の土壙である。125×140cm、深さ 35cm。

SK28（第 24 図）

Ⅰ区調査区東側で確認された方形の土壙である。一辺 85cm、深さ 15cm。

SK32（第 24 図）

Ⅰ区調査区東側で確認された円形の土壙である。径 60cm、深さ 25cm。土器が廃棄されていた。**出土遺物（第 25 図）**　44～46 は弥生土器の甕。44 は口径 16.9cm、底径 5.9cm、器高 21.9cm。胴部外面下半はヘラナデ、上半はハケ目。頸部～胴部内面はハケ目。焼成は良好。胎土は石粒・微細粒を含む。色調は黄褐色。45 は口径 19.3cm、底径 6.4cm、器高 27.2cm。胴部外面下半はヘラナデ、上半はハケ目。頸部内面はハケ目、胴部内面はハケ目のちナデ。焼成は良好。胎土は微細粒を含む。色調は黄褐色。46 は口径 20.3cm、底径 5.5cm、器高 26.9cm。胴部外面下半はナデ、上半はハケ目。頸部～胴部上半まではハケ目。下半はヘラケズリとナデ。焼成はやや不良。胎土は石粒を含む。色調は暗褐色～黄褐色。

SK61（第 24 図）

Ⅲ区調査区南端で確認された土壙墓である。平面プランは方形隅丸。長さ 220cm、幅 74cm、深さ 22cm。東側に土師器などが副葬されている。**出土遺物（第 25 図）**　47～51 は土師器の坏。47 は口径 11.6cm、底径 6.8cm、器高 3.1cm。底部はヘラ切り、他はヨコナデ。焼成はやや不良。胎土は金雲母を含む。色調は淡明橙色。48 は口径 11.7cm、底径 7.0cm、器高 3.1cm。調整は 47 と同じ。焼成はやや不良。胎土は金雲母を含む。色調は明橙色。49 は口径 11.7cm、底径 7.5cm、器高 3.0cm。底部はヘラ切りのちナデ、他はヨコナデ。焼成はやや不良。胎土は金雲母を含む。色調は明橙色。50 は口径 11.4cm、底径 7.7cm、器高 2.9cm。底部はヘラ切りのちナデか、他はヨコナデ。焼成はやや不良。胎土は微砂粒を含む。色調は橙色～明黄褐色。51 は口径 12.1cm、底径 6.9cm、器高 3.2cm。底部はヘラ切り後ナデか。他はヨコナデ。焼成はやや不良。胎土は微砂粒含む。色調は浅黄橙～橙色。52 は土師器の椀。口径 13.4cm、底径 7.2cm、器高 5.0cm。底部内外面はナデ、他はヨコナデ。焼成はやや不良。胎土は微砂粒を含む。色調は橙色～浅黄色。53 は黒色土器の椀。口径 15.7cm、高台径 7.6cm、器高 6.2cm。高台は貼り付け高台。内面のみ燻している。ミガキと思われるが表面が風化している。焼成は良好。胎土は砂粒を多く含む。色調は淡黄色～黄灰色。

第3章　まとめ

今回の調査地点における検出遺構は、掘立柱建物1棟、竪穴住居16軒、溝1条、井戸17基、土壙墓1基、土壙3基ほか多くの柱穴・ピットであり、遺構の密度は非常に濃かった。隣接する第18次調査地点においても調査面積に比べ多くの遺構が確認されたことからも当該地域は連続的に集落を形成していたことが伺える。

掘立柱建物は1棟のみだが、他にも柱穴・ピットを多く検出していることからも、重複して建物が建っていたものと思われるが、明確に建物になるものを見つけられなかった。遺構の時期は出土遺物が砕片なため詳細は不明である。

竪穴住居は16軒と非常に多く検出された。竪穴住居の分布を見ると（第9図)、住居の方位に規格性があることが見えてくる。SC09、SC24、SC44などのN-15～20°-Eに主軸をとるもの、SC11、SC45などのN－10～15°-Wに主軸をとるものの2つがある。切り合い関係から前者が古く、後者が新しい。遺構の時期としてはSC09の出土遺物から古墳時代後期頃と考えられるため、前者の主軸を持つものはその時期になるか。ただ多くの住居から出土遺物は砕片であり、明確な時期決定ができなかった。

SD03は調査区内で唯一確認された溝である。凡そ南北に延びており、北側で途切れている。北に向かって傾斜している。同時期のSC09と主軸方向が似ていることから関連する溝であると考える。時期は出土遺物から古墳時代後期頃である。

井戸は17基検出したが、そのすべてが素掘りの井戸である。深さも2～3mと深く、底には完形に近い土器があり、祭祀に用いられたものと考える。遺構の分布を見ると（第17図)、ある程度まとまりを持っていることがわかる。一部住居と重複しているものもあるが、多くは住居がないところに存在しており、当時の集落構成を伺える。井戸の時期はSE50、SE63、SE64などは弥生時代後期前葉～中葉、SE06 、SE102 、SE67などは古墳時代頃であると考えられる。

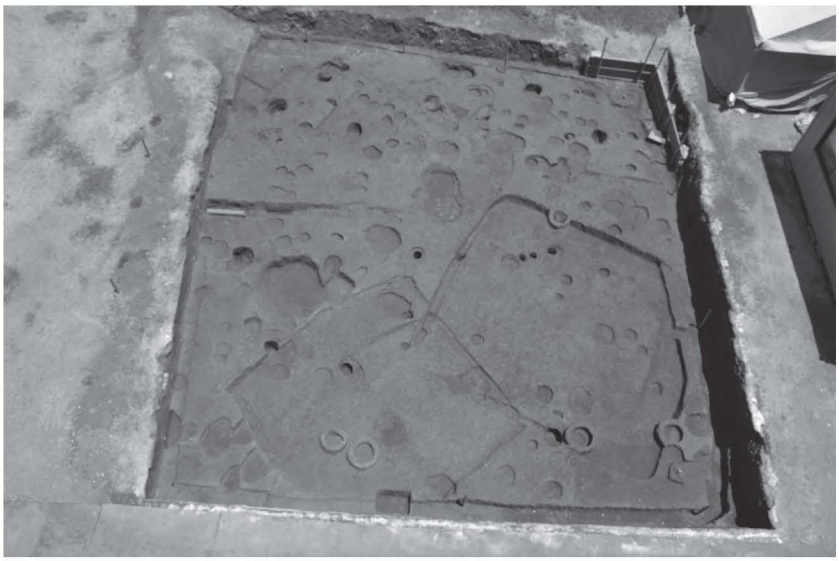
最後に本調査地点で唯一見つかった古代末～中世初頭の土壙墓である。土壙墓内の東側に土師器や黒色土器などを供献している。規模が長さ220cm、幅74cmと大きく成人の墓と考えられる。比恵遺跡群内ではこの時期の土壙墓はほとんど見つかっておらず、詳細がわかっていない。隣接する山王遺跡や那珂遺跡群などでは見つかっており、そことの関連が考えられる。

以上のように、本調査地点では弥生時代から中世初頭までの遺構・遺物を検出し、連続的に集落が営まれていた様相が確認された。ただそれぞれの遺構の性格付けまで明らかにすることができなかった。今後の調査の進展を待って、改めて考えてみたい。

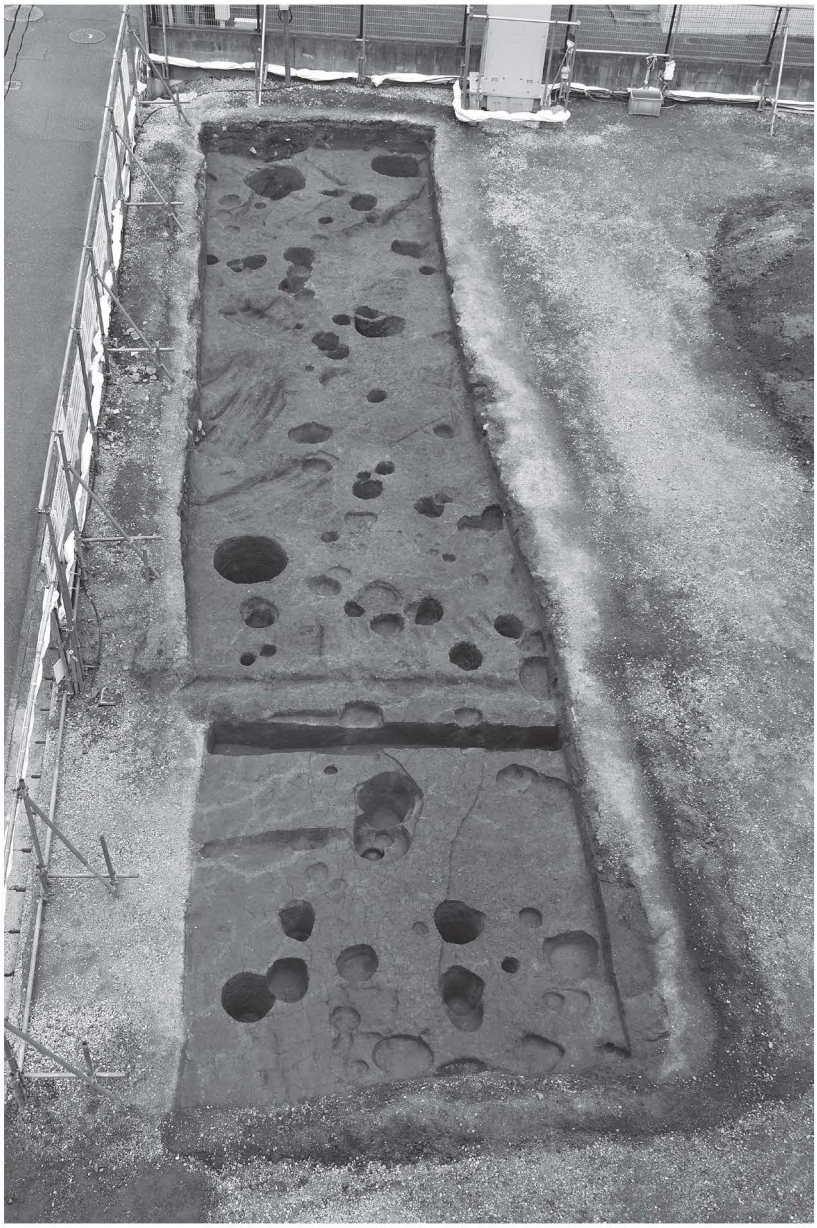
図　版

図版 1

(1) １区調査区全景（南西から）

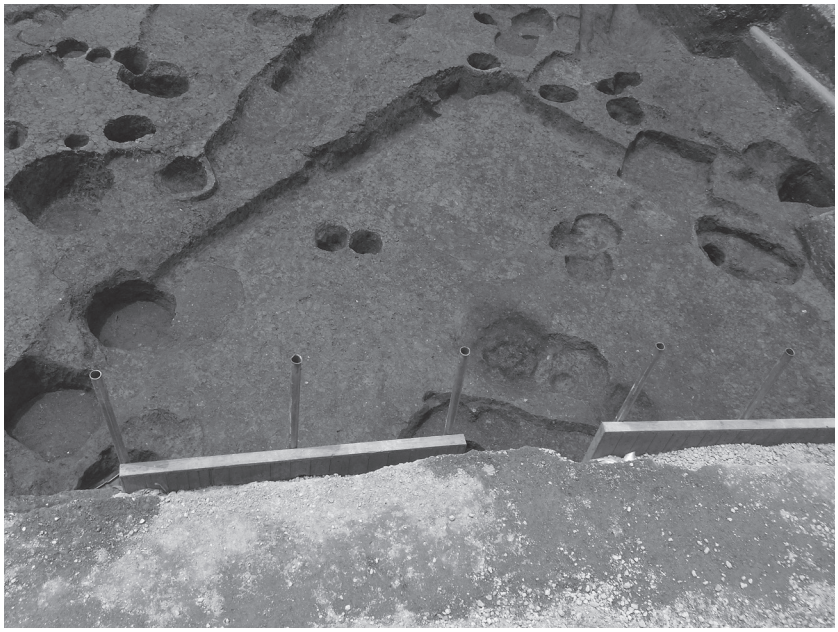


(2) ２区調査区全景（南西から）



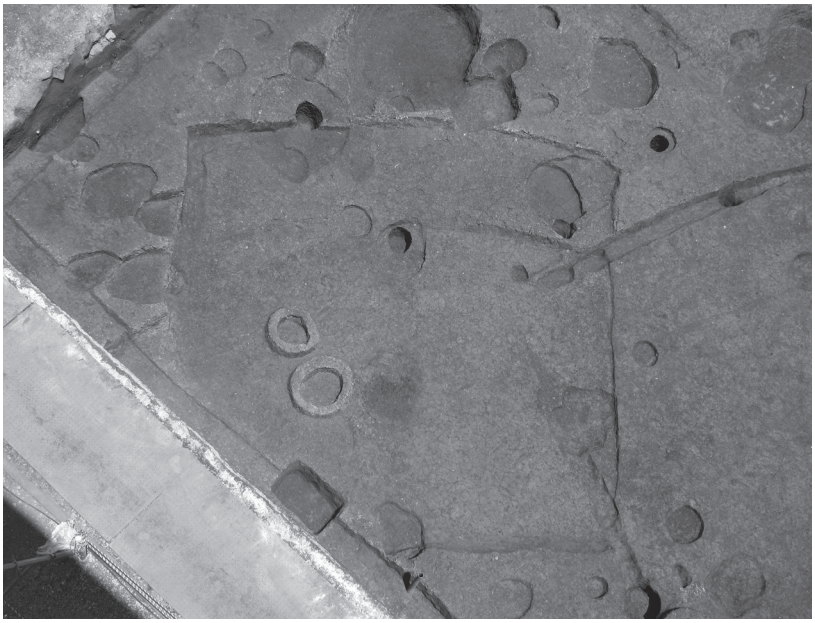
(3) ３区調査区全景（南西から）

(4) ＳＣ11（西から）

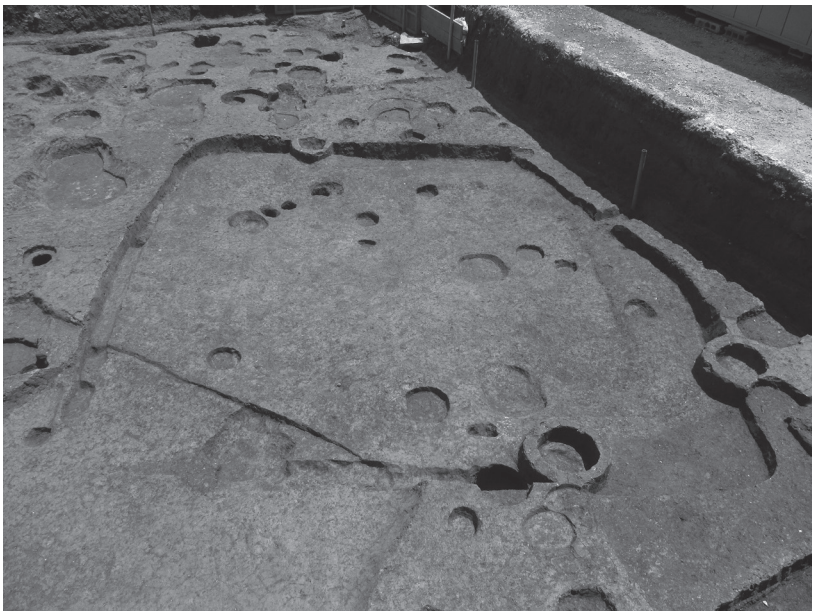


(5) ＳＣ24（南東から）

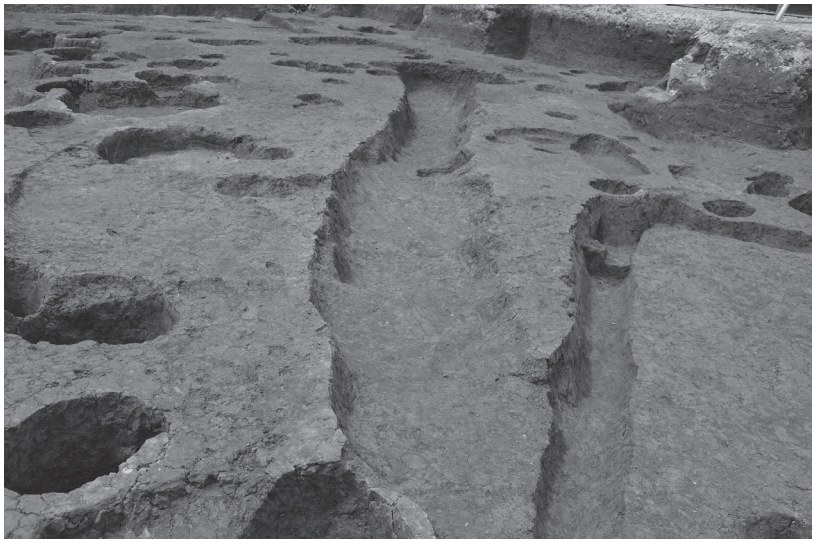
(6) ＳＣ24 炉跡
（東から）



(7) SC44（南から）



(8) SC45（西から）

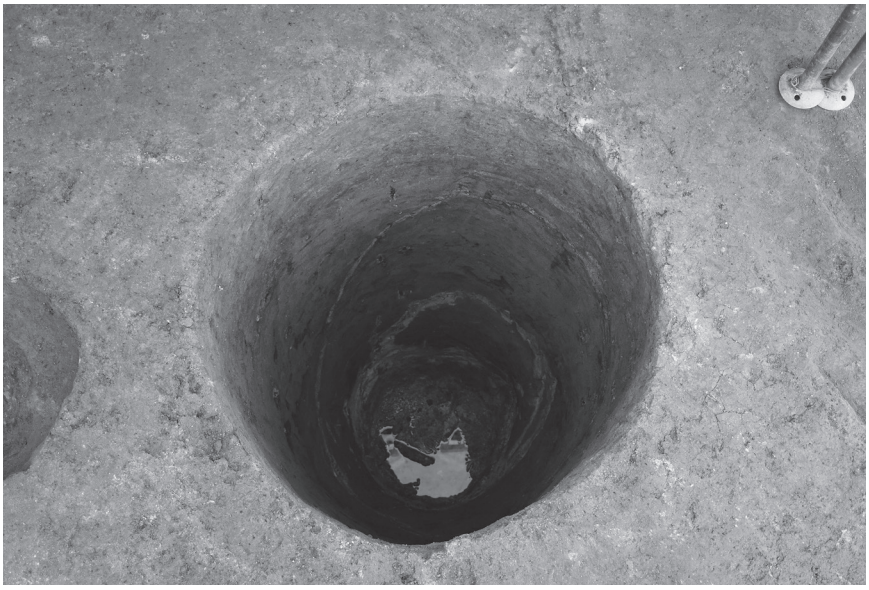


(3) SD03（南から）

(10) ＳＥ62（北から）

(11) ＳＥ64（西から）

(12) ＳＥ64 土器出土
状況（西から）



(13) ＳＥ67（南から）

(14) ＳＫ31（東から）

(15) ＳＫ61（北から）

図版７

出土遺物（１）

出土遺物（２）

図版９

31

32

33

34

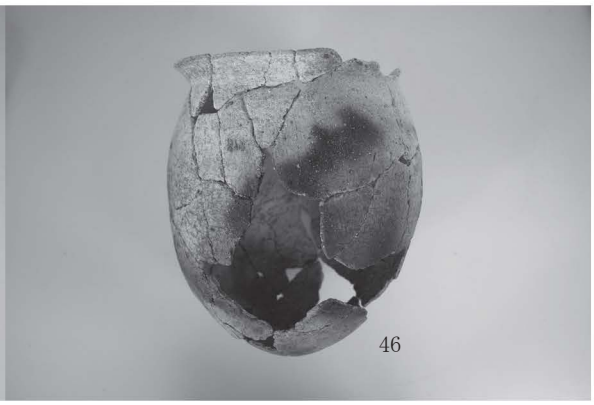
35

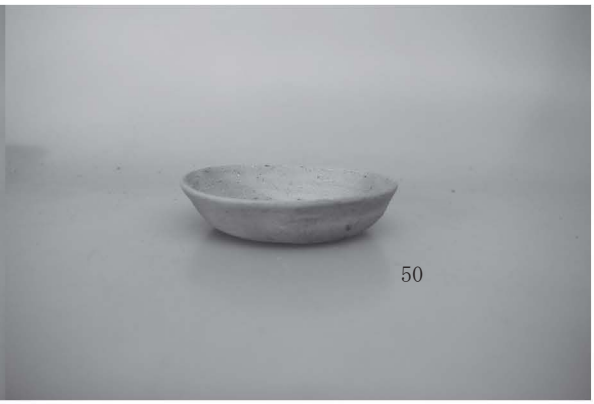
36

40

41

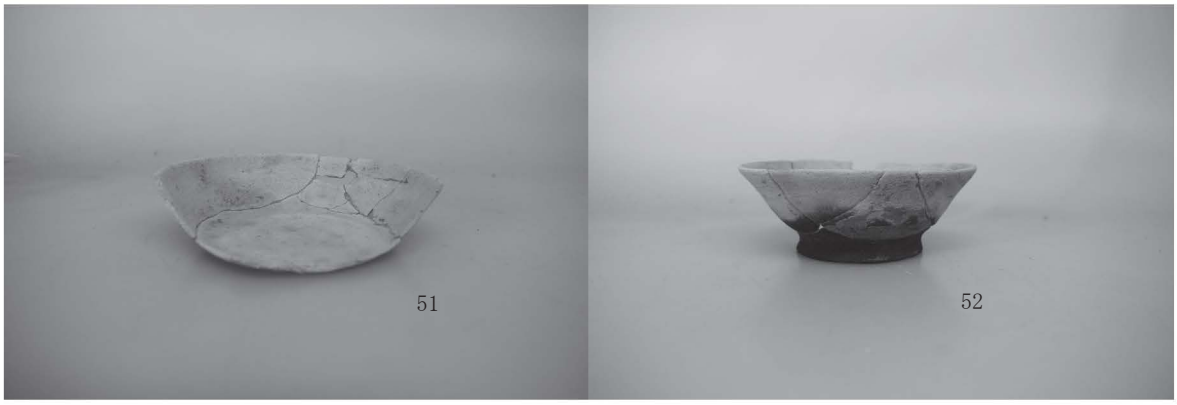
出土遺物（３）

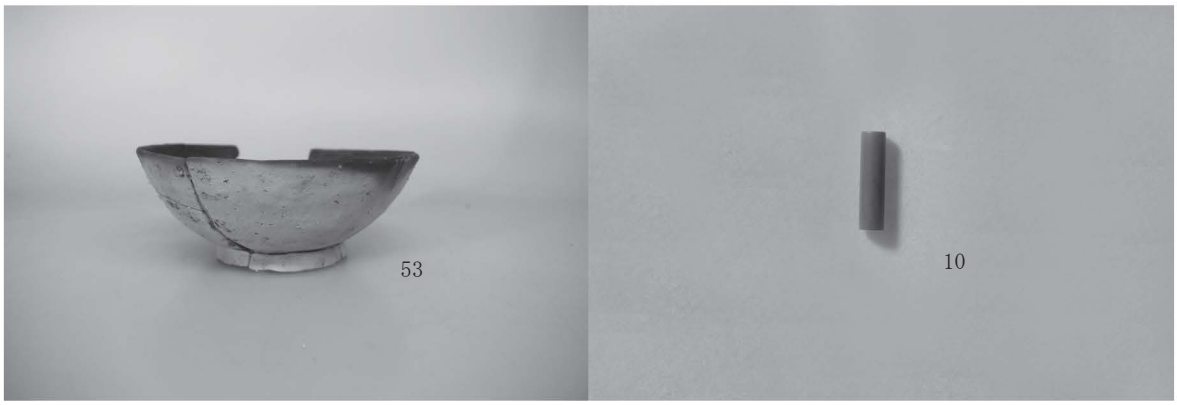


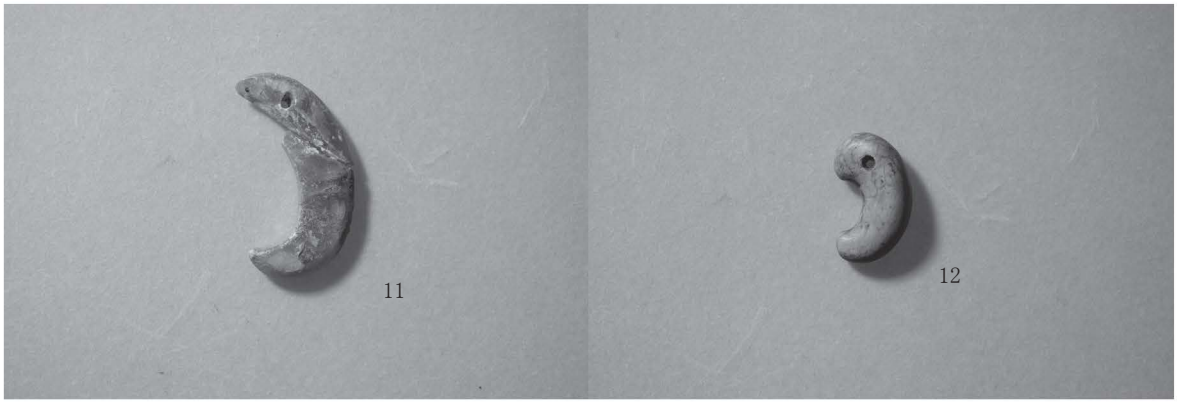


出土遺物（４）

図版１１







出土遺物（５）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひえ81
書　　名	比恵81
副　書　名	―比恵遺跡群第142次調査の報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1349集
編著者名	山本晃平
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL 092-711-4667
発行年月日	2018年3月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ひえいせきぐん 比恵遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくえきみなみ6丁目17-1 博多区駅南6丁目17-1	40132	127	33° 34′ 34″	130° 25′ 56″	20160509 ～ 20160916	379	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡群 第142次調査	集落	弥生時代後期 古墳時代後期 中世	竪穴住居 井戸 土壙	弥生土器、土師器、須恵器、滑石製装飾品	弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と中世墓を検出

要　約	本調査地点は博多区に所在する洪積台地の比恵・那珂丘陵の中央部にあり、比恵遺跡群の南辺部中央に位置している。弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と中世墓を検出した。集落跡は方形の竪穴住居、掘立柱建物、素掘りの井戸、土壙等で構成されている。中世墓は土壙墓である。 検出した遺構・遺物から、当地では弥生時代中頃から人々の生活が顕在化し、以降も継続して生活が営まれ、特に弥生時代後期と古墳時代後期に集落の盛期を迎えていることが判明した。

比恵 81

―比恵遺跡群第１４２次調査報告―
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1349集

2018 年（平成 30 年）3 月 26 日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
印　刷　株式会社　宣巧社
福岡県福岡市博多区吉塚 8 丁目 7 番 30 号